演劇創造

復　刊
第137号
（第52巻 第2号）
平成29年(2017年) 11月15日 発行

―― 発行 全国高等学校演劇協議会 ――
〒270－0025 千葉県松戸市中和倉590－1　千葉県立松戸高等学校　TEL(047)341－1288　FAX(047)346－4002
事務局長　阿　部　　順
ホームページ http://koenkyo.org/　　メール info@koenkyo.org

第63回大会審査の経過

第63回全国高等学校演劇大会は、広瀬川流るる美しき「杜の都」仙台市の「仙台銀行ホール　イズミティ21」を会場として、８月１日（火）から８月３日（木）の３日間にわたって開催されました。今大会の専門審査員は、多彩な人物を演じ分ける役者であり劇作家・演出家である有限会社遊機械オフィスの高泉淳子氏、海外にも活動の幅を広げておられる演出家であり俳優でもあるTHEATER MOMENTSの佐川大輔氏、日本大学芸術学部演劇学科教授の藤崎周平氏、舞台美術家の伊藤雅子氏、４名の方々にお願いしました。顧問審査員は茨城県立石岡第一高等学校の来栖敏行先生、富山第一高等学校の近藤三知子先生、徳島県立阿波高等学校の大窪俊之先生、３名の先生にお願いしました。

先ず、大会前日に審査の進め方や方向性等の打ち合わせを行いました。大会中は昼食の時間にも、作品の感想や工夫されていた点、惜しかった点等の意見交換をして、大会二日目の上演後にはそれまでの上演校10校について講評を行い、大会三日目の上演終了後にはすべての上演について審査を行いました。最優秀賞と優秀賞については、投票の結果を踏まえて得票順に様々な視点から議論を進めて決定しました。さらに創作脚本賞、舞台美術賞、内木文英賞、特別賞についてもさらに議論を重ねて決定しました。

兵庫県立東播磨高校「アルプススタンドのはしの方」については、とても多くの意見が出ました。まず、役者のすばらしさ、声の出し方、会話のテンポ、動きの中やタオルを使いながら話す演技などが評価されました。さらに、一幕劇で大きな事件が起きているわけではないのに、高校生それぞれの抱える問題や思いが伝わってくる。野球の時間と演劇の時間が計算されていて60分間よく観客をつかんでいた。才能なきものが有能なものを見つめている構図も良い。甲子園ならではの問題も改めて考えさせられた。などという意見がありました。埼玉県立秩父農工科学高校「流星ピリオド」については、学校が持っているテイストをよく出している。無機質なセット、役者のレベル、作品の構成やスピード感などが評価されました。比較的暗くて深い空間表現。高校生ありのままの言葉。現実（なにも起こらない、起こせない）とバーチャルの空間で、現実がネットに侵食されていく恐怖感があった。高度な演出を高校生がやるのは大変だっただろう。などという意見がありました。茨城県立日立第一高校「白紙提出」については、リアルな高校生の作品そして演出であると思う。女装をする男子高校生。過去にとらわれコンプレックスを抱えたまま生きていく心の揺れがよく出ていた。重くなりがちな話を純粋で芝居心満載に演じていて救われた。などと評価されました。沖縄県立向陽高校「ＨＡＮＡＢＩ」については、本当に楽しい文化祭とは何か、実際、舞台上でも自分たちのやりたいことをやっている。楽しんでいるなあと思いながら、こちらも楽しく観ることができた。どこまでも突っ切るような勢いがあった。転換などには専門的な工夫が生きており、椅子の使い方も巧みだった。などと評価されました。

創作脚本賞は、徳島市立高校「どうしても縦の蝶々結び」の林彩音さん・村端賢志さんに授与されました。母子家庭で忙しい母に蝶々結びを教えてもらえなかったリアルな高校生の話で、貧困を理由に教師になる夢をあきらめざるを得なかった女子高生が、自分と似た境遇にある子と出会うことで成長していく過程が繊細な筆致で丁寧に描かれている。事務職員などの登場人物の描き分けもうまくできている。などと評価されました。舞台美術賞は、福島県立相馬農業高校飯舘校「－サテライト仮想劇－いつか、その日に、」に授与されました。繊細なお芝居で、あえて色々なものをそぎおとすことによって象徴的なものを残してくれたと感

じた。星空と校舎のシルエットが効いている。最後の机で学校を作るシーンも良い。実際に彼らが感じていることを観客が広げて観ることのできる舞台である。などと評価されました。内木文英賞は、北海道北見緑陵高校「学校でなにやってんの」に授与されました。日の当たらない文化部の様子を描いた作品で、ギャグをつないでとにかく面白かった。セットでもできる限りのことをやっている。人間関係や展開を工夫してさらに面白くしてほしい。などと評価されました。今後いっそうの活躍を期待しています。特別賞の東京演劇大学連盟賞は、最優秀校の兵庫県立東播磨高校に授与されました。副賞としてワークショップ講師を東京演劇大学連盟より派遣していただきます。ワークショップは最優秀校の地区や県で共有します。この他の学校も、初演から様々な困難を乗り越えて工夫を続け、この全国大会の場にレベルの高い演劇を作り上げて来られました。おかげで 3 日間、楽しんで観劇することができました。敬意を表すとともに心より感謝いたします。

（事務局　木村　文明・中島　憲）

【最優秀賞（文部科学大臣賞・全国高等学校演劇協議会会長賞・東京演劇大学連盟賞）】

兵庫県立東播磨高等学校
　籔　博晶／作『アルプススタンドのはしの方』

【優秀賞（文化庁長官賞・全国高等学校演劇協議会会長賞）】
（上演順）

埼玉県立秩父農工科学高等学校
　コイケユタカ／作『流星ピリオド』
茨城県立日立第一高等学校
　磯前　千春／作『白紙提出』
沖縄県立向陽高等学校
　吉澤　信吾／潤色（竜史作「文化祭大作戦」より）『ＨＡＮＡＢＩ』

【優良賞（全国高等学校演劇協議会会長賞）】（上演順）

千葉県立八千代高等学校
　堤　泰之／作『煙が目にしみる』
徳島市立高等学校
　林　彩音・村端　賢志／作『どうしても縦の蝶々結び』
宮城県名取北高等学校
　安保　健＋名北演劇部／作『ストレンジ　スノウ』
明誠学院高等学校（岡山）
　螺子頭　斬蔵／作『警備員　林安男の夏』
福島県立相馬農業高等学校飯舘校
　矢野　青史／作『－サテライト仮想劇－いつか、その日に、』
岐阜県立加納高等学校
　白梅かのこ／作『彼の子、朝を知る。』
北海道北見緑陵高等学校
　北見緑陵高校演劇部／作『学校でなにやってんの』
埼玉県立新座柳瀬高等学校
　稲葉智己／翻訳 ピエール・ド・マリヴォー／作
　「Le Jeu de l'amour et du hasard」より『Love ＆ Chance！』

【舞台美術賞】－サテライト仮想劇－いつか、その日に、
　福島県立相馬農業高等学校飯舘校
【創作脚本賞】林　彩音・村端　賢志『どうしても縦の蝶々結び』
【内木文英賞】北海道北見緑陵高等学校

第63回　全国高等学校演劇大会（みやぎ総文2017）　審査集計用紙

月日	上演順	ブロック	学校名	作品名	作者	創/既	高泉	佐川	藤崎	伊藤	来栖	近藤	大窪	計	賞
8月1日（火）	1	関東	千葉県立八千代高等学校	煙が目にしみる	堤　泰之	既成									優良
	2	関東	埼玉県立秩父農工科学高等学校	流星ピリオド	コイケユタカ	創作		○	○	○	○	○		5	優秀
	3	四国	徳島市立高等学校	どうしても縦の蝶々結び	林彩音・村端賢志	創作	○			○			○	3	優良
	4	開催県	宮城県名取北高等学校	ストレンジ　スノウ	安保健＋名北演劇部	創作									優良
	5	関東	茨城県立日立第一高等学校	白紙提出	磯前　千春	創作		○	○		○	○		4	優秀
8月2日（水）	6	九州	沖縄県立向陽高等学校	ＨＡＮＡＢＩ（竜史 作「文化祭大作戦」より）	吉澤　信吾	潤色	○		○	○	○		○	5	優秀
	7	中国	明誠学院高等学校	警備員林安男の夏	螺子頭　斬蔵	創作						○		1	優良
	8	東北	福島県立相馬農業高等学校飯舘校	―サテライト仮想劇―いつか、その日に、	矢野　青史	創作									優良
	9	近畿	兵庫県立東播磨高等学校	アルプススタンドのはしの方	籔　博晶	創作	○	○	○	○	○	○	○	7	最優秀
	10	中部日本	岐阜県立加納高等学校	彼の子、朝を知る。	白梅　かのこ	創作		○						1	優良
8月3日（木）	11	北海道	北海道北見緑陵高等学校	学校でなにやってんの	北海道北見緑陵高等学校演劇部	創作	○						○	2	優良
	12	関東	埼玉県立新座柳瀬高等学校	Love ＆ Chance！（ピエール・ド・マリヴォー作「Le Jeu de l'amour et du hasard」より）	稲葉　智己	翻案									優良

千葉県立八千代高等学校

埼玉県立秩父農工科学高等学校

徳島市立高等学校

宮城県名取北高等学校

茨城県立日立第一高等学校

沖縄県立向陽高等学校

明誠学院高等学校

福島県立相馬農業高等学校飯舘校

兵庫県立東播磨高等学校

岐阜県立加納高等学校

北海道北見緑陵高等学校

埼玉県立新座柳瀬高等学校

「演劇は人を結ぶ」

杉内　浩幸

第63回全国高等学校演劇大会が無事閉幕致しました。４月の停電事故による波乱の幕開けとなった今大会ですが、大きなトラブルもなく終えることができました。出場校の皆様、全国理事・常任理事・全国事務局の皆様、そして観客の皆様方の厚いご支援に対し、心から御礼申し上げます。また、先催県である広島県・滋賀県の先生方にも、折に触れて様々なアドバイスを頂きました。感謝の念に堪えません。

今大会の課題は３つありました。東北地区では、事前作成の照明データを使用して上演するということがありません。しかしこれでは出場校のプランに対応できないことがわかりました。結局、業者が事前にデータ打ちをすることで落ち着きましたが、大会１ヶ月前まで出場校の皆様を混乱させる結果となってしまいました。改めてお詫び申し上げます。二つ目は、受付でのお客様への対応において、上演後、喫煙や買い物などで短い時間、会場の外に出たいというお客様をどうするかという問題です。これについては、理由の如何を問わず、一度受付を出られた場合はもう一度並んでもらうことを徹底しました。その結果、様々な苦情を受けながらも毅然とした方針でルールを徹底することができました。三つ目は、240人の係生徒の研修です。考えたのは「ブラザーシステム」です。今大会の理念や意義に始まって、運営の方針、業務内容に精通した生徒を２年間かけて育て、その生徒たちに下級生たちを指導してもらおうというものです。当該年度になってから行った３回の研修会は、このブラザーシステムを有効に動かす原動力となりました。まず、開催県出場校の壮行公演を行い、受付や会場係の生徒の研修に充てました。次に、生徒実行委員・総務係の生徒70名ほどを集めての、係業務のワークショップを行いました。そして最後に、全顧問、全係生徒による、２日間の研修会。広島視察の伝達研修、おもてなし研修を行った後、係毎に入念な打合せを行いました。そして大会最終日、全生徒、全顧問が一堂に会し、お互いの健闘をたたえ合ったときの感動は今も忘れることができません。未熟さや衝突を乗り越えての瞬間だっただけに尚更です。振り返れば、控えめに、我慢強く、状況を何とかしようという、東北人らしい粘りのあるおもてなしができたのではないかと思っています。

さて、宮城大会の８日間は、嵐のように過ぎ去りました。先生方や生徒実行委員50名と後片付けの時間を過ごしながら、私には次の長野大会の姿が見えていました。この濃密な２年間は、次の開催県に繋がっているのだということを実感した瞬間です。そして約半世紀後に訪れるであろう宮城大会に思いを馳せながら、楽しそうに最後のお弁当を食べる生徒たちの姿に、「演劇は人を結ぶ」という言葉が浮かんできました。長野大会の成功を心から祈念して、結びとします。

（第41回全国高等学校総合文化祭演劇部門　代表委員）

宮城大会を終えて

吉田ほのか

皆様、みやぎ総文2017演劇部門、第63回全国高等学校演劇大会はいかがだったでしょうか。私たち宮城県生徒実行委員会は、宮城県の良さを最高のおもてなしでお伝えしようと、２年前から活動をしてまいりました。当時の私達は、まだ「全国大会」というものに実感が持てませんでした。ですが、その翌年にひろしま総文を視察させていただき、いかにこの大会が全国の皆様、そして演劇部員にとって大きなものかということを、肌で感じることができました。広島県の実行委員の皆さんは一人一人が自らの仕事を全うし輝いていて、私達は憧れと同時にこのような素晴らしい大会を私達が運営できるのかと不安にもなりました。しかし、多くの方々にたくさんのサポートをして頂いたおかげで、段々とその不安は小さくなっていき、宮城県らしい全国大会にしようと集中して考えることができました。宮城県らしい大会とは一体どんなものだろうか、と実行委員で話し合いをした時、やはり一番に思いつくことは、全国大会を楽しんでもらうと同時に東日本大震災について、全国の皆様に思い出していただき考えてもらおう、という事でした。震災を実際に経験した私達にしか伝えられないことがあると考え、震災遺構マップの作成や震災カルタの展示など様々なブースを設置しました。大会では多くの方々がブースを見て回って下さりとても嬉しく想いました。ありがとうございました。大会期間中は、12校の熱い想いのこもった上演で初日から３日目まで会場の雰囲気はどんどん盛り上がっていき、最高の盛り上がりの中で大会を無事終えることができました。閉会式の緞帳が閉まると、この２年間やりきったという思いとたくさんの方々の演劇に対する熱い想いが伝わってきて、今まで体験した事のない気持ちになり目頭が熱くなりました。このような素晴らしい大会に生徒実行委員長として関われたことは私にとって大きな宝になりました。本当にありがとうございました。さて、次年度は長野大会です。宮城を越える熱い夏になるよう応援しています！

（生徒実行委員長 宮城県仙台三桜高校）

涼しくも熱い５日間

小野 祐稀

今回の宮城大会は、雲に覆われた日が多く気温も上がらなかったため、地元民としても比較的過ごしやすい天気が続いた。しかし、会場であるイズミティ21大ホールはものすごい熱気に包まれており、上演校も観客もその熱が冷めることはなかった。それは、２階ホワイエで活動していた生徒講評委員会も例外ではなかった。

全国大会が始まる２日前。生徒講評委員が全国各地からここ、宮城県に続々と集まってきた。ほとんど初対面だったこともあり、皆緊張した面持ちで静かに先生方の声に聞き入っていた。そんな委員たちがようやく打ち解け始めたのは夜になってから。正直、このメンバーでやっていけるのか、という不安は大きかった。ところが、生徒ミーティングを始めた５分後には笑いが起きていた。お互いに壁を無くしていこうと積極的に動く姿を見て、不安が希望に変わった。２日間の研修を終え、いよいよ私たちも本番の時が迫ってきた。

私たち生徒講評委員会は、全国大会で上演された12本の劇を観て、「何を感じ、何を得たか」について討論を行い、講評文を作成した。こうして書くとシンプルだが、決して楽な活動とは言えない。討論で発言する人が絞られてしまったり、討論そのものが深まっていかなかったり、講評文にまとめ切れなかったりなどと、15人の色がうまく混ざり合わず、頭を抱えることもあった。それでも、自分たちなりに、自分たちの言葉で講評文を作成し、その作品の魅力を全国に発信しようと委員が一丸となって講評活動を行った。

この５日間を通して、今までとは違う視点から物事を見たり、委員長という大役を務めたりしたことで、人間として大きく成長することが出来た。ここで出会った14人（＋１人）の仲間、先生方、係生徒、観客の皆様に支えられたからこそ、このような有意義な活動が出来たのだと思う。昨年の広島大会から引き続き、素敵な経験をさせて頂いた。本当にありがとうございました。来年の長野大会の講評活動がより一層素晴らしいものになることを心よりお祈りします。

（生徒講評委員長　仙台市立仙台高等学校）

演劇とは想像する力と楽しませる力

高泉　淳子

京都の八幡市での全国大会以来10年振りに審査をさせて頂きました。それまで高校演劇に触れることのなかったわたしは、想像していた以上のレベルの高さと熱さに驚かされました。２度目ということもあって、高校演劇の凄さを体感してしまったせいもあり、以前より厳しい目になっていたかもしれません。今回は全体的に作品のテーマ、表現力が少し幼い感があるなと思いました。物足りなさを感じてしまいました。小手先で上手くまとめてしまった感がある。まとめにかかるよりも、高校生という世代にしか表現できないダイナミックさがあってもよかったかと思います。

芝居を創るに当たって、いちばん肝心なのは、ディティールです。出来上がるまでの過程。どんな過程を踏んで、上演するための設計図、台本までに至ったか。まとまらなくて何度も話し合い、書き直したのか。既成の戯曲を使用するに当たっても、最初はオリジナルの本を試みたのか、何冊もみんなで読みあさったのか。表現は芝居に限らず観る相手がいないと成立しないものです。送る相手がいるからこその表現。送られた相手にどのように感じてもらいたいか、それを想像して、贈り物、プレゼントを探すのです、創るのです。簡単に探してきたプレゼントでは人は感動しない。どんなに悩んで考えて、喜ばれるものを探してきたか、創ってきたか、そのディティールに人は感動するのです。

作品が出来上がるまで、12校それぞれのディティールがあったと思いますが、わたしがその過程に面白味を感じたのは、**茨城県立日立第一高等学校『白紙提出』、北海道北見緑陵高等学校『学校で何やってんの』、明誠学院高等学校『警備員林安男の夏』。**

『白紙提出』は作、演出を３年生の磯前千春さんと明記し、彼女を責任の軸とし、部員がいろいろアイデアを上げ､意見をしあい、創り上げていった過程が見えた。ずいぶん没にしたシーンもあったのではないでしょうか。その思い入れが役者の演技にも繋がっていたと思う。それが観客の心に伝わり、客席を湧かせていた要因だと思う。主人公演じる福島俊君も魅力的だった。ただ残念なことにラストに向けて収束してしまう。主人公がどう現実に生きようとするのか、あろうとするのか、立派なまとめ方は必要ないけれど、「え！そうきましたか」という終わり方があったならば、最優秀校に選ばれたかもしれません。**『学校で何やってんの』**これも同じ感がある。主人公の柴田由紀奈さんをはじめ、登場人物を演じる役者達は魅力的だ。シーン、シーンの展開もテンポがあって、飽きさせない。ラストに向けて主人公が青い光のパソコンに向かって何を語るのだろうか、固唾を呑んで観ていた…、が、「みんなとやるのが楽しい」…、ちょっとお粗末な台詞ではないか。この２作品は、最後まで面白可笑しく、センスよく展開して、観客の心を掴んでいただけに、非常に惜しい作品。**『警備員林安男の夏』**も演出の三宅悠生君、主人公の藤井夢我君を軸に硬派にしっかりと創り上げた作品だと思いました。ただ作家の世界感に演出が近寄りすぎて、はみ出すものがなかったような気がする。この３作品はあれやこれやの創作過程が伺え、その結果、役者が生き生きしていて登場人物が個性的でした。

福島県立相馬農業高等学校飯舘校『－サテライト仮想劇－いつか、その日に､』この作品は舞台美術はシンプルで、モノローグのフレーズは詩のようで、４人の登場人物は静かで淡々としていて、質のよい作品でした。静けさの中に高揚感があれば、感動できる作品になったと思います。

沖縄県立向陽高等学校『ＨＡＮＡＢＩ』は登場人物15人、一人一人を生かした、演劇の面白さが十分伝わってくる躍動感溢れる作品でした。同世代の生徒達はこれを観たらみんな演劇が好きになるのでは。

徳島市立高等学校『どうしても縦の蝶々結び』、作は林彩音さん、演出は町田衣及里さん。主人公の大川瑠奈さんを主軸に置いて、女性ならではの感性で描かれ、丁寧に創られた作品。もっと狭い空間で演じることができたら、心理描写が細かく伝わったと思います。

埼玉県立秩父農工科学高等学校『流星ピリオド』、

本はちゃんと書けてるし、生徒は今ある力を存分に使って難しい台詞を表現できてるし、何も言うことはありません。そこから作家と演出家が想像もしない何かが部員から生まれてきたら、感心から感動の作品に変わるでしょうね。

高校演劇において、顧問が作、演出で突出していると、完成度はあっても部員を一人一人生かした作品になるか、それが観客に伝わってくるかは難しいものがある。顧問が書くな、演出するなとは言いません。顧問は最初の観客であり、良きアドバイザーであって欲しい、わたしはそう思うのです。

兵庫県立東播磨高等学校『アルプススタンドのはしの方』は顧問が書いた作品ですが、部員を生かした台詞の書き方をしていること、部員が今現在共感する世界を描いていること、その瞬間瞬間生きた言葉を語らせるように仕向けていること、それよりなにより、部員達が面白がって生き生きと演じていること、それが書かれた本以上の作品になったと思います。主人公の大西史華さんの台詞回し、人物と自分との距離感、素晴らしかったです。

宮城県名取北高等学校『ストレンジ　スノウ』はテーマがテーマだけにモノトーンで表現するのではなく、それぞれの人物をもっと個性的に演じていたらどうなっていたのだろう、興味深い作品です。

岐阜県立加納高等学校『彼の子、朝を知る。』は構成劇に必要な演じる側の話を引っ張る表現力が強ければ、レベルの高い作品になっていただろうと思います。

千葉県立八千代高等学校『煙が目にしみる』は自分とは違う年齢の違う人物、かけ離れた人物を演じるときに演技力を伴わなければならないことを知って欲しい。

埼玉県立新座柳瀬高等学校『Love ＆ Chance!』も、虚構感が強い芝居、シンプルなコメディーを演じるときは、身体の使い方、台詞の言い回しに、大変な技量が必要であることを知って欲しい。難しいけれど、それができることも、芝居の面白いところ、醍醐味なのです。

（役者・劇作家・演出家）

「今だけの輝きに溢れた3日間。ありがとう。」

佐川　大輔

選び抜かれた12校。心打たない作品はありませんでした。審査結果はみんなの努力を貶めるものではありません。大いに笑い、涙し、感動した。ありがとう。

講評は演出家としての立場が主です。コンクールの目的は「演劇創作の向上」と考え、改善点も上げました。悔しい人は演劇を続け、世界をぎゃふんと言わせてほしい。切に願います。

千葉県立八千代高校『煙が目にしみる』

火葬場を舞台にし、「逝く人と残された人」について描いた秀作。プロ既成台本のため、９役の殆どが人生経験豊富な妙齢の登場人物たちでしたが、あえて高校生が演じる演劇的な仕掛けが喜劇性を増幅させたと思います。主役二人のやり取りも楽しく、演技もセリフも明瞭、特に動きがよく研究されており、演劇への真摯な姿勢が伝わります。惜しむらくは、リアル大人である私目線では、どうしてもリアリティが少し不足して見えたことと、観客に伝えようという意識が強すぎた（特に正面芝居）がゆえ、表層的に感じる点を改善すれば、よりウェルメイド（冥途？）コメディになったかな。しかし、「命の輝きに溢れた高校生」が「人生の最後」を演じることで、より「今、生きている尊さ」が強調されたのは、私にとって大きな気づきになりました。

埼玉県立秩父農工科学高校『流星ピリオド』

俳優の演技力、リズミカルな場展、的確なスタッフワーク、脚本の巧みさなど、非常に総合力の高い演劇でした。「同級生の死の謎を探る」という推理劇でありながら、舞台設定をLINEの中にしたのが秀逸。「人の繋がり」や「見えている世界」の不確かさへの問題提示も行い、何気ない日常から後半全く違う世界が立ちあがっていく構成には舌を巻きました。気になった点は、ウェブ上を設定にしたため、前半は各役の日常が見えず区別しにくいこと、また、やり取りはリアルな対面式のため、チャット感が揺らいだように思いました。しかし、スタンプ絵や、早いセリフ回し、場面の質感の変化で、それら弱点を気にさせなかったのは演出力の勝利。「美しい流

星群」と「自殺」を「40秒に一回」という言葉で繋げ、価値観の転換をさせるロックな作品でした。

徳島市立高校『どうしても縦の蝶々結び』

まずは、戯曲完成度の凄さ。生徒創作とは思えない人間観察力、繊細な視点に驚愕しました。そこに基づいた芝居も誠実丁寧。「高校の事務室」セットはリアル、主人公を筆頭に各役もキャラは明確で、生活すら感じる自然な演技は、プロにも見せたいほど。また、なるべく華美な演技演出を抑えることで、あえて想像力を喚起する手法には卓抜したセンスを感じました。が、一方、３度の回想や、ストーリ展開の予想できる後半をテンポよく凝縮することで、強度は上がったのでは？また、繊細さの反面、見えづらい場面があるなど、劇場の全観客への配慮が弱い演出も感じられたのが、非常に残念。しかし、抑制の利いた演出が、「貧困の連鎖」という問題をより切実に伝えたのは確かです。作り手の温もりと微細への拘りがある美術工芸のような演劇でした。

宮城県名取北高校『ストレンジ　スノウ』

前半の恍けたギャグや牧歌的なセリフ回しから喜劇と思っていたら、中盤から様相が一変。実は震災の傷跡が大口開けて待っていたのだと気づく恐ろしい作品でした。「震災トラウマに苦しむ演劇部員が、妄想することで辛い現実を捻じ曲げてしまう」というテーマの巨大さと現在性は、今大会屈指の深刻さで、宮城県で上演されたことも衝撃的。震災という不条理が、現代のギリシア悲劇を生み出したと震えました。しかし、テーマ偏重のためか構成演出に少し改善点がみえ、中盤の冗長な展開、多い登場人物の未整理に加え、独特なセリフ術や、誇張されたキャラ造形も作品世界との相性に違和感がありました。とはいえ、「虚構を生きることで、現実を調整する」という演劇効能に対し自己批判をする凄み、そして、ラストの慟哭。忘れられません。

茨城県日立第一高校『白紙提出』

幕開きダンスから60分、一気に魅せられました。舞台は主人公の部屋。夏休みの宿題をしに同級生が集まるという日常設定ながら、息もつかせぬ面白さは俳優のチームワークの抜群さ。各役が魅力的で自分を曝け出す演技は痛快。身体表現、映像投射、入退場のアイデア、一人複数役など創意工夫に溢れ、楽しい稽古場が想像できる座組でした。しかし、内包するテーマは決して軽くない。前半で笑いを取る性癖ネタが、中盤から「性癖≒カミングアウトできないアイデンティティ」という「高校生のリアル」が見える構成は才気アリ。重いテーマを、緩急自在に軽く描く演出に非凡さを感じました。終幕の投げかけが弱い気がしましたが、「安易に答えを出さず、迷うのも若さ」という主張と見れば、それも有り。これから色づいていく若者（≒白紙）の未来に幸あれ。

沖縄県立向陽高校『ＨＡＮＡＢＩ』

等身大の15役（役名が本人の名前！）が会場中を暴れ回る純度100％青春芝居。自分たちが満足できる「ロミ＆ジュリ」上演へ奮闘する群像劇ですが、実際の上演もひたすら面白いものへと邁進する演者が実に清々しかった。転換の多さも躍動感溢れるアンサンブルや、ストップモーション、あえてベタな音響＆照明などの多彩な演出で推進力にしてました。初歩的ミス（照明エリア外れ、切っ掛けミスなど）が散見しましたが、その不安定さもライブの魅力に見せた時点で演者の勝ち。しかし、60分を通してのピーク演出意識が不足かも。後半の「ロミジュリ」をより生き生きと俺達流にできていれば、「権威に負けない若さ」という主張がより雄弁かと思いました。が、こんな大人の意見、気にしない。権威に捉われず、ラストよろしく風切って爆走し続けてくれ。

明誠学院高校『警備員林安男の夏』

「記憶を失った地縛霊としがない警備員が出会い成長する」というバディもの。役者二人がギャップある会話で笑いを取りながら、感動の終幕まで持っていく演技力は見事。また、印象的な照明、登場しない人物のNA音響、一目でキャラがわかる衣装、桜吹雪など、スタッフワークも工夫が凝らされたことで、会話劇でありながら、単調さを感じさせませんでした。特に、一瞬で開閉する装置は驚きで、教室という閉鎖空間から一気に世界を広げる効果は絶大。照明との効果も相まって、ラストは大会屈指の圧倒的な絵でした。ただし、全ての演出が効果的かといえば、やや過剰な気も。例えば、同じ曲を何度も使うならば何か狙いが欲しい。「この効果でどんな印象を与えたいか？」の演出視点の元、常に模索しより良い創作を期待します。

福島県立相馬農業高校飯舘校『－サテライト仮想劇－いつか、その日に、』

放射能で避難した実在のサテライト高校を舞台に、

いつか元の学校に戻る日を想像し創作。秀逸なのは、あくまで仮想の話でありながら、観客の想像を刺激し「福島の今と近い未来」を思わせたことです。固有名詞がリアルな戯曲を元に、簡素美のセット、飾らない素朴な演技、明度を抑えた照明という「引き算」の美学が、見えない部分をより感じさせてくれたのは、高度な演出。特に机や椅子を重ねて作った「校舎」を見るラストは、登場人物と同じ目線を観客が共有した奇跡的瞬間でした。個人的にセリフのやり取りが弱く見えたのと、上演よりも台本を読んで理解した点があったのが残念でしたが、拙くても、粛々と。弱くとも、必死に。演劇にはこういう表現もあると、私の心にしっかと刻み込まれ、深く感動しました。

兵庫県立東播磨高校『アルプススタンドのはしの方』

まず、俳優陣の素晴らしさ。甲子園の応援席の隅で傍観してる4人。絶妙なボケと突っ込みを入れつつ、最後には力の限りの声援へと変化する一幕を演じきってくれた。試合経過、飛球、選手など舞台外の世界を観客が想像できたのは、細部までイメージを共有した練習量の賜物でしょう。また、スタッフワークも高水準で、特に全編流れる応援歌や歓声で、劇場を野球場に変貌させたのは圧巻でした。あえての改善点は、展開が王道すぎて、先が予想できてしまう点。先読みさせないほど夢中にさせるには、山場のリズムアップが大事。また、観客の期待をいい意味で裏切るのも、演劇の面白さと考えると新しい地平が見えるかも。かくにも、最優秀おめでとう。試合終了と終幕の拍手を同化させて、客席全体を作品の一部にしたラストも天晴。

岐阜県立加納高校『彼の子、朝を知る。』

開演ブザーに合わせ、「ブザーが鳴った。」と始まる冒頭。観客をドラマに引き込むのではなく、今この瞬間を共有し思考を喚起するポストドラマ演劇への挑戦が頼もしい。17名の俳優の発声＆身体性も高い上、アンサンブルの抽象表現、観客への語り掛け、花火と銃声を重ねた音や心臓音などの演出がハイレベルに成功しています。演劇的な仕掛けをリズムよく、随所に配置し、そのイメージの連鎖にはドキドキしました。また、「あったらしい朝」という言葉で、海外の戦禍と過去の戦争、そして、高校生の現在を交信していく狙いも意欲的で面白い。しかし、こういった構成芝居で陥りがちな「結局何が言いたい？」という問いに答えられる強度が欲しい。大多数を圧倒する作品を目指し、演劇の可能性を開拓し続けてください。切望します。

北海道北見緑陵高校『学校でなにやってんの』

舞台は放送部の部室のよう。「セットが少し変？」と思っていたら、何とびっくり、壁がバンバン動く。「説明しよう」と台車で説明役登場、あえて同じパターンの回想、早送り、スロー、ストップと演劇的な遊びをこれでもかと詰め込み、本筋ではない挿入場面を魅せる演出は白眉。それを支えた沢山の黒衣や照音装衣の見事な仕事にも拍手。また、主人公と先生の掛け合いを筆頭に役者陣も、吉本新喜劇のようなドタバタが強烈に楽しい。観客と一緒にお約束を作っていくライブ感を生かしたTheエンタメは爽快でした。ただし、サービス精神が強すぎて、本筋の主人公達の葛藤の掘り下げが二の次になっている感も。登場人物の変化過程が、少し唐突に感じてしまった。抱えてる問題の初期設定を強くし、成長の伏線を大事に積み上げられたら文句なし。

埼玉県立新座柳瀬高校『Love ＆ Chance！』

古典の翻案作だが、冒頭から中世感が明快なセット衣装。「高校生が美麗キャラで演じる古典」に新鮮さを感じました。大量の場面転換も、膨大な照明キューを掌握し、照明エリア分け、芝居との呼吸抜群のキューで、観客視点を誘導したのは見事。また、舞台セットにも仕掛けがあり、出ハケ、位置どりなど細部への計算に演劇愛を感じました。俳優も皆、闊達で身体性が高く、スピード感あるセリフも明瞭で、基礎力はトップクラス。しかし、膨大なセリフの早口処理や、戯曲の展開速度が現代人には遅いため、中盤でやや冗長に感じることも。緩急を入れた演出で魅せたい焦点を絞って欲しかった。また、この作品を今上演する意味も問いたい。欧米では古典上演に批評意識は重要であり、僕も「典型を超えた何か」を見つけてほしい。けど、それは高望みかな？

最後に。悔しくて、喜んで、涙したのは頑張った証。それだけ夢中になれた時間はこれからの人生において、必ずや大きな糧になるはず。皆の未来に幸あれ！

（演出家　俳優　THEATRE MOMENTS主宰
日本演出者協会国際部部長）

尾を引く高校演劇の面白さ

伊藤　雅子

今まで何度か各地域の大会を審査させていただきました。その都度若いエネルギーを浴びて、自分が成長させられる思いでいます。今回もハイレベルな戦いの場に居られたことが光栄です。そして、楽しみました。楽しいというのを誤解しないでいただきたいのですが、講評することの楽しさではなく、未来に輝くであろう皆様と会えるのが楽しいということです。

全国大会まで勝ち抜いてきた学校ですから、既に全体のレベルが高いですし、空間の構成もきちんと出来ている学校ばかりです。この状況で、私が何を言えるのかとも思いましたが、私なりに各校をさらに良くなるためのアドバイスをしたつもりです。そして、あくまで私の個人的な意見だということを頭の片隅に置いていただければ幸いです。１校ずつ振り返りながら改めて思い出して見ようと思います。

千葉県立八千代高等学校『煙が目にしみる』

メインである銀杏をとても綺麗に見せていて、生と死の間だということがよく伝わって来た美術でした。ただ、出はけの設定が曖昧に見えてしまったので、舞台美術は、空間を演出してしまうことを意識してデザインするともっと良くなると思いました。

埼玉県立秩父農工科学高校『流星ピリオド』

この作品は、美術家からの発想なのか演出家からの発想なのかお客様が迷ってしまえるくらい作品として完璧に重なり合っていました。現代の人が、感じる圧迫感を建物にも見えるバランスで、また携帯の中の点と線の表現を鉄骨で立体的に表現することで、現代人の中に入り込んでくるという状況が浮かび上がり見事でした。囲われていることで、出たいと思っていても出られない。最後にホリゾントになり少しの希望を抱いてからの死は、いい意味で衝撃的で、どうしたら抜け出せるのかということを考えさせられました。

徳島市立高校『どうしても縦の蝶々結び』

とにかく、幕が上がって、びっくり！本物の世界がそこにありました。

扉など本物を使用していますので、音もリアル。壁は持って来れないと思いますので、作り物だと思いますが、負けていないです。全てが完璧でした。コピー機まで動くという小道具の細部にまで目が行き届き、何もいうことがないと思いました。ただ、作品としてみた時に、一番伝えたいであろうことは、少女の過去や母親との関係で、記憶を振り返ることで、気持ちの変化が起こるという重要なシーンが後ろになってしまったということ。時空が飛ぶわけですから、美術としての使い方も思いきって飛んでいいと思いました。部屋外を真っ黒で表現しているのですから、舞台前側にも黒い空間があって、そこがとある時から、廊下になるとか。美術家としての提案が必要になると思いました。

宮城県名取北高校『ストレンジ　スノウ』

全国大会に向けて、美術を一新したのだと思います。同じところにとどまらず、進化し続ける！非常に素晴らしいことだと思います。壁が厚いことで、どんなことがあっても、ビクともしないのだというイメージに、また、シェルターのようにも見えたり。一人の少女の心に重たくのしかかっている何かを伝えるという表現になっていると思いました。別空間に登場する２名ともバランスがよく非常に良かったと思います。ただ、美術家として、表現するにあたって、この作品には、息を抜ける瞬間が欲しいと思ってしまいました。震災の現地の方々に比べたら、とてもちっぽけな傷ですが、それでも震災当時テレビの映像や実際に体感した地震によって、全くデザインできなくなってしまいました。この経験をしている一人として。演出にも絡んできますが、「それでも人間生きていく、前に進む」ということを伝えられる表現を探せたらと思いました。その思いを美術だけで背負うことは出来ませんが、背負ってみるのもいいかもしれませんね。

茨城県立日立第一高校『白紙提出』

部屋の表現が、細かくとても良く出来ていました。完全な男子というよりは、女装の趣味を持つ男子の清潔感もあったりなど伝わり易い装置だと思いました。また、彼の心の叫びをプロジェクターで、部屋全面に映し出すという方法も彼の強い思いが突き刺さりました。テーブルも２台使うなど、いたってシンプルで自然な行動だと思い。プロだと、最初から大きなテーブルを作ってしまったりする事もあるので、正しい！と観ながら「よし！」と小さい声で言ってしまったくらいです。

沖縄県立向陽高等学校『ＨＡＮＡＢＩ』

思い切りがいい！劇場全体を思いっきり使い頼もしかった。演劇祭的なめちゃくちゃさもありましたが、それが良い意味で、楽しい作品に仕上がっていました。前半は、椅子をとても賢い使い方していました。全体的に濃淡があり、何もない美術を堂々と使いこなしていました。「ロミジュリ」のバルコニーを椅子を使わずに背中に登ってというのは、「ブラボー！」色々なアイディアが満載。

吊りものがアップするのか、降りるのかタイミン

グを見ていたり、扉を閉め忘れたり、映写機の出ハケなどハプニング！？それともそれも計算！？というところ全て含めて面白かったです。これが計算だったら、末恐ろしい（笑）

明誠学院高等学校『警備員林安男の夏』

凄く良く出来ていたのです。教室外の廊下まできちんと作っていました。パネルが開くことでのスタジアム。最高でした。ただ、どうしてもこのおどろおどろしい、世界が幽霊から見た世界だったということに気づけなかったのです。悔しい。。。上をいかれてしまったよー。

福島県立相馬農業高等学校飯舘校『－サテライト仮想劇－いつか、その日に、』

空間の表現がとてつもなく綺麗でした。抽象は、本当に必要な情報のみをきちんと切り取り、お客様に伝えて行くということだと思いますが、それが、お見事。また、お客様に想像させる余白がありました。個人的には、ホリゾントの量を減らしても良いように感じました。この一瞬を切り取った、真っ白い写真（床と同じサイズくらい）が吊ってある。そこに、新たな個々人の１ページを追加させるようなイメージでしょうか。観ながらすっかり私の五感をくすぐられました。

兵庫県立東播磨高校『アルプススタンドのはしの方』

わかりやすい美術で、装置が邪魔をせず、芝居に集中することができました。これは、非常に重要な事です。見下ろしている演技があるので、装置的には、もう少し高くても良かったかな。あとは、荷物で作ったフェイドアウト感が少し気になりました。ただ、それを上回る面白さと人間関係でした。

岐阜県立加納高校『彼の子、朝を知る。』

人生の積み重ねという櫓が、非常に良くできていました。綺麗に積み上がっているので、オブジェとしての存在感がとても大きかったように感じます。色々な人、物との繋がりを感じることができました。櫓の影も素敵でした。やはり、作品は、光と影です！影を表現すると浮き上がってくるものがあります。

北海道北見緑陵高校『学校で何やってんの』

黒衣の存在と同じく、舞台美術の装置というものは、動くものですよ。このように転換されるものですよ。ということを作品と一緒に表現していて、観ていて非常に痛快でした。それも芝居の邪魔になっているどころか、転換を楽しめる作品作りは、難易度高いです。ということで、あっぱれ。

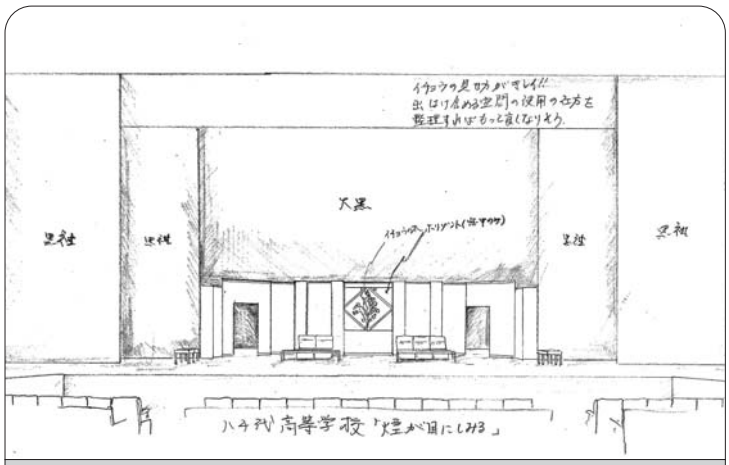
埼玉県立新座柳瀬高校『Love ＆ Chance!』

わかりながら見せて行くという完全な喜劇芝居。美術もしっかりとそれに対応して、見えるということを前提とした配置を組み、なおかつ台下を面白くしっかり使えていました。役者の感じるドキドキと、観ているお客様のドギドギ。それぞれ違うドキドキがしっかりと伝わって来ました。子供に戻った気分でした。

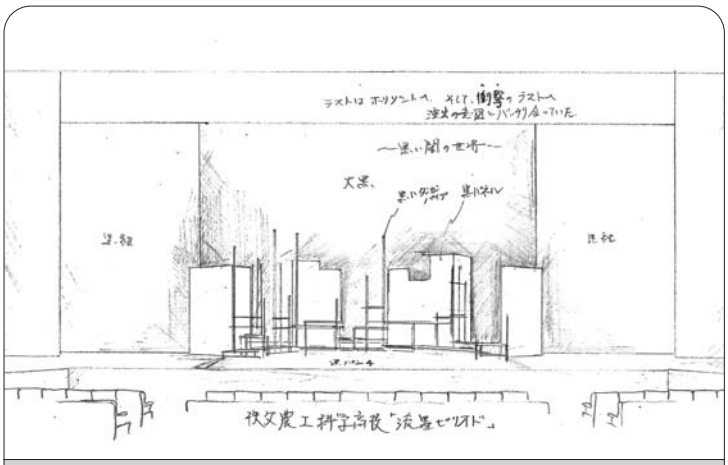
毎回終わった後に、反省反省。自分が言われたく無いことまで言っている自分がいるのではないかと。いつか、私がおばあちゃんになる前に現場で会いましょう！どんな立場でも演劇を好きでいてください。そして楽しんで！

ありがとうございました。　**（舞台美術家）**

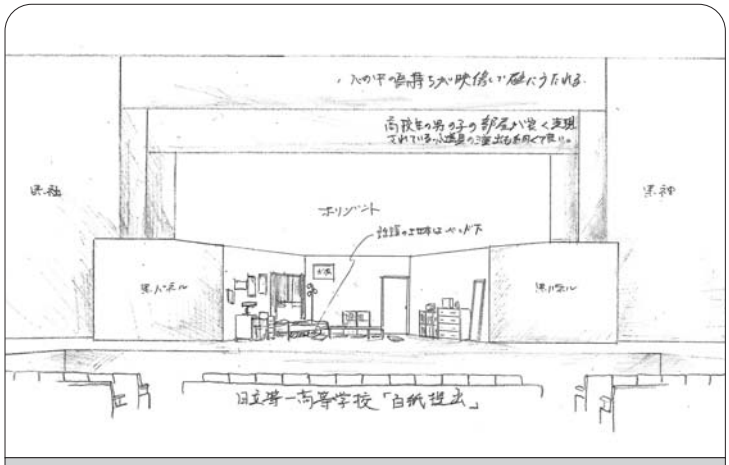
第63回宮城大会



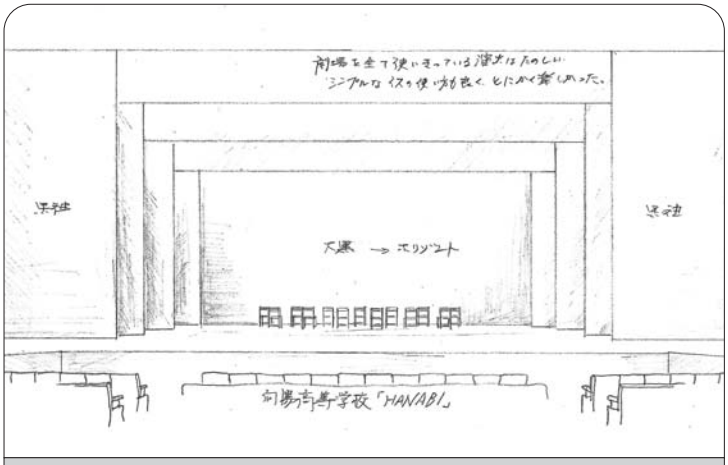
千葉・八千代高等学校
「煙が目にしみる」



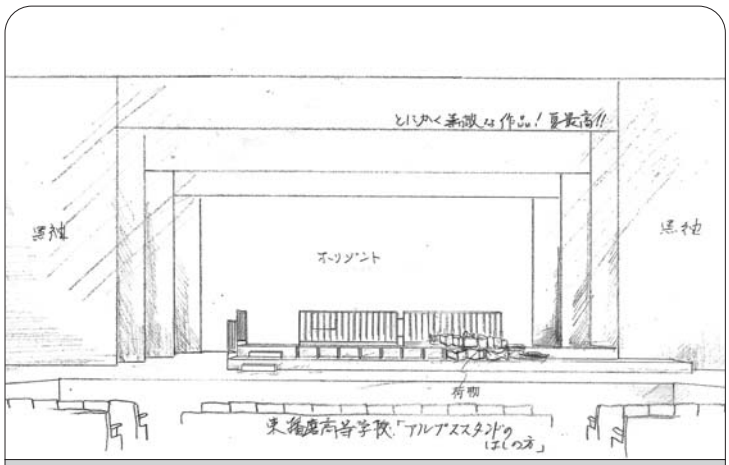
埼玉・秩父農工科学高等学校
「流星ピリオド」



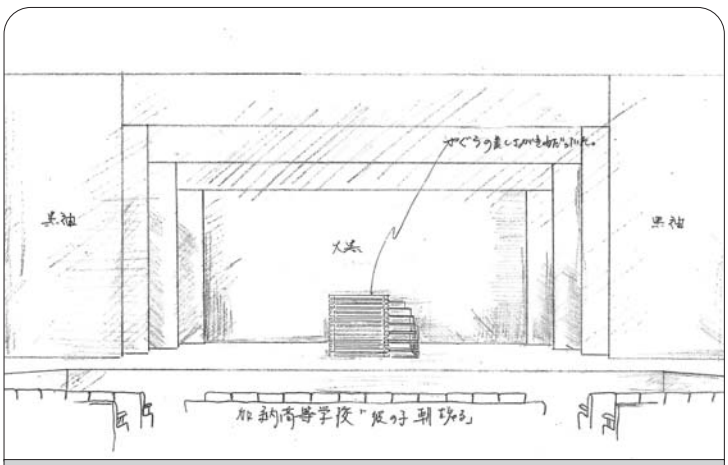
茨城・日立第一高等学校
「白紙提出」



沖縄・向陽高等学校
「ＨＡＮＡＢＩ（竜司作「文化祭大作戦」より）」

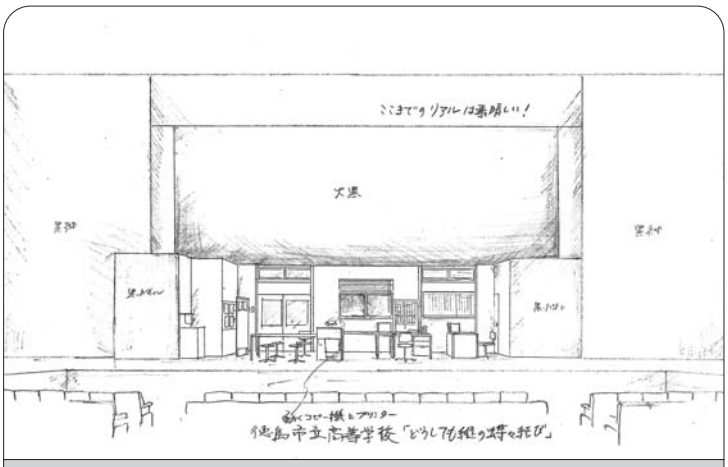


兵庫・東播磨高等学校
「アルプススタンドのはしの方」

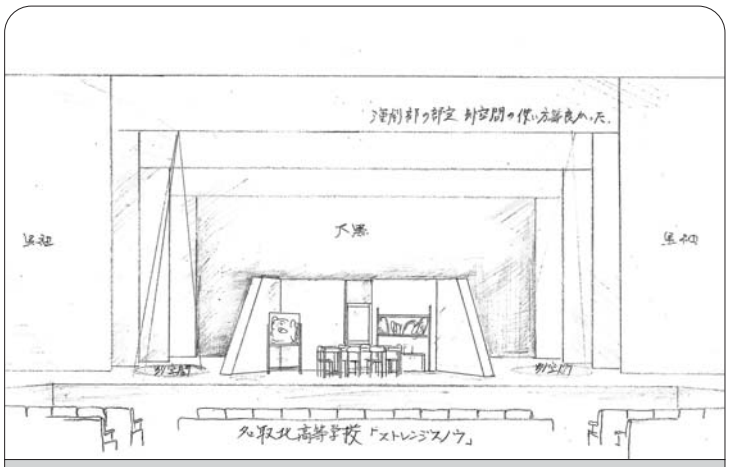


岐阜・加納高等学校
「彼の子、朝を知る。」

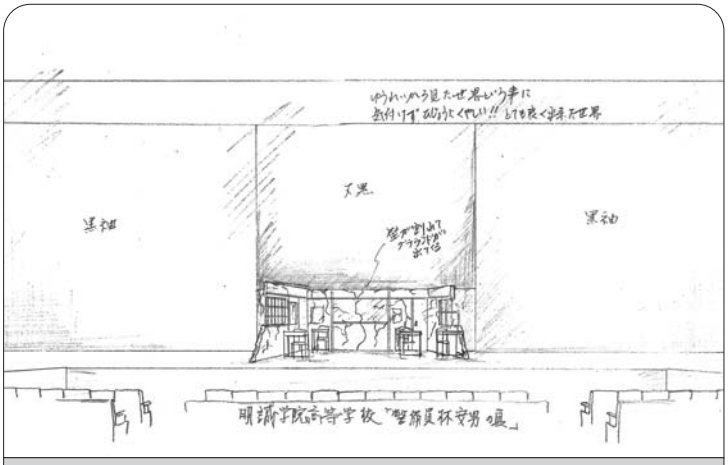
舞　台　図



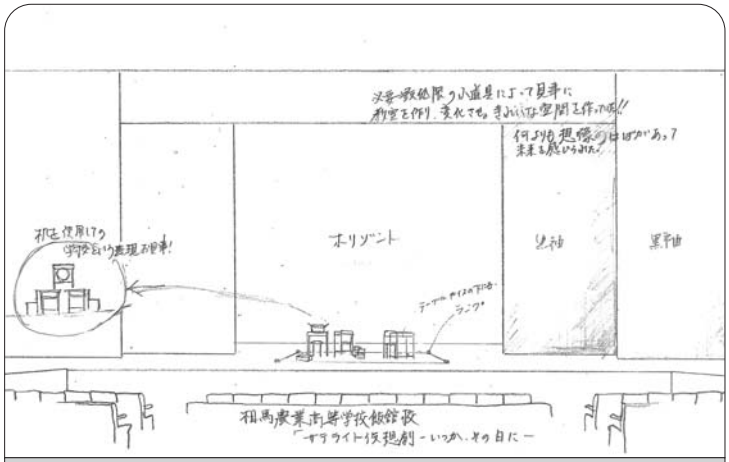
徳島・徳島市立高等学校
「どうしても縦の蝶々結び」



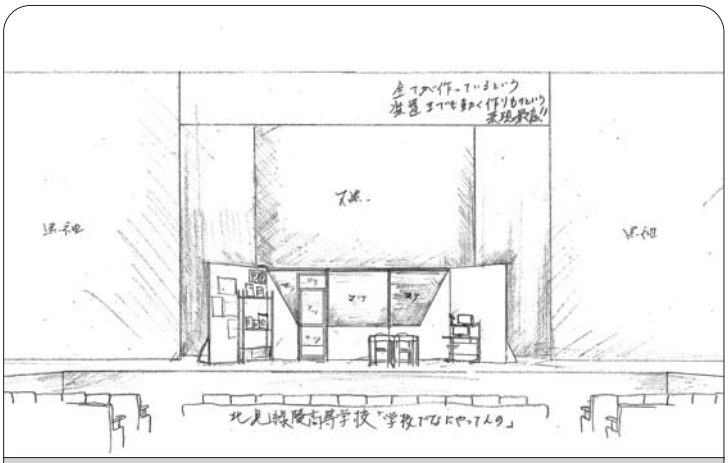
宮城・名取北高等学校
「ストレンジ　スノウ」



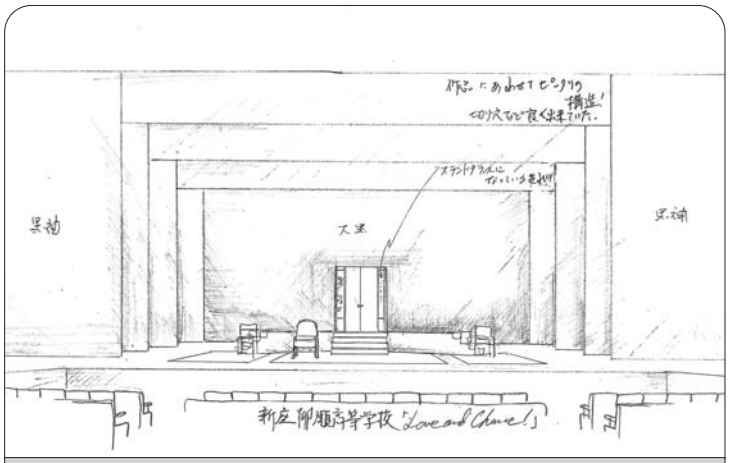
岡山・明誠学院高等学校
「警備員林安男の夏」



福島・相馬農業高等学校飯舘校
「－サテライト仮想劇－ いつか、その日に、」



北海道・北見緑陵高等学校
「学校でなにやってんの」



埼玉・新座柳瀬高等学校
「Love ＆ Chance！」
（ピエール・ド・マリヴォー作「Le Jeu de l'amour et du hasard」より）

氷山の一角を観て

藤崎　周平

会場内で上演を支える、緑のシャツを着た宮城県の演劇部関係者を見るにつけ、「高校演劇」という氷山の大きさをつくづく考えさせられた。今回視た12本の作品はその一角でしかない。ただ、その全体像を想像するに相応しい魅力と可能性を持っていた。

千葉県立八千代高等学校『煙が目にしみる』

この作品の見どころは、野々村家の認知症の祖母が、死者たちの言葉を家族に伝えることによって、壊れていた家族関係が修復されていく部分にある。既成戯曲のリメイクに挑む意欲は買うが、台本のカットによって家族間の溝が見えにくくなり、若者が年長者役を演じることも加わって、どうしても喜劇性のイメージのみ感じられてしまった。

埼玉県立秩父農工科学高等学校『流星ピリオド』

現代の高校生のインターネット上でのコミュニケーションを扱った作品である。亡くなったはずのミイコから情報が発信されていく。疑心暗鬼に陥るかっての仲間たち。そこからヴァーチャルな世界内で共同体を作る、彼等の繊細な生の輪郭が浮かび上がる。ラストで高所からフライングして自死を遂げるユズハの残像が、その落下音と共にズシンと突き刺さる。後味は悪いがこれが現実だ。

徳島市立高等学校『どうしても縦の蝶々結び』

学内での「貧困」の問題を扱っている。演技陣は皆真摯に課題に向かい合って演技力も高い。その中で、職員役の遠藤の存在が、淡々と進むモノクローム的な世界にアクセントを添えた。コピー機が止まらなくなり、紙が溢れ出るシーンは、もっと過剰の方が、主人公の心情がより伝わった。回想シーンの見せ方にも工夫が必要だ。

宮城県名取北高等学校『ストレンジ　スノウ』

被災して親族を失った子供たちが、死をどのように受け入れていくのか。生き残った人間は、それをどう見守るのか。現在進行形の問題がそこにある。堤防に囲われているようにも見える、分厚い壁に覆われた演劇部の部室が、シェルター内のようにも見え、外部と断絶した世界に感じられた。最後にこの壁が消え、雪が降ってくるところで幕になるのではと想像した。どこかでカタルシスを求めているからであろうか。それを許さない本作には、観客に現実を見つめさせる強度があった。

茨城県立日立第一高等学校『白紙提出』

冒頭のダンスシーンから、芝居心とサービス精神に満ちていて楽しい。劇中で主人公前原紘生の父と母と弟の３役を一人の役者が演じる（役名は前原家）。舞台の虚構性を強くアピールする一方で、中学の文化祭で女装して踊ったダンスが忘れられず、勉強も思うようにはかどらない思春期の紘生の不安定な内面が、夏休み最終日の切羽詰まった午後を背景に、見事にクローズアップされた。

沖縄県立向陽高等学校『ＨＡＮＡＢＩ』

前半は舞台の後方に後ろ向きに椅子を13脚並べて、椅子付近と舞台前方とを重ねながら、文化祭で『ロミオとジュリエット』を発表することになった、クラス劇の準備風景を見せる。劇を作っていく上で共同体や個人が抱える問題は、そのまま演劇部で作品を作っていく過程を批評している。適任のキャラクターたちは、花火のように舞台で弾んだ。後半は作品上演のシーンとなる。自分たちの主体性を示し、最後は先生にもシェイクスピアにも反抗して、２人は生き返ってハッピーエンドとなる。ただ、ラストシーンは、もう一度クラスに戻ったほうが収まったのではなかろうか。

明誠学院高等学校『警備員林安男の夏』

自らの存在を失いかけた、まったく立場の異なる二人（一人は幽霊）が再生していく物語。怪談仕立てになっており、装置と照明、音響を駆使しながら観客を惹きつける。メイン二人の演技力のレベルは高く、特に自縛霊役はメイクも凝っている。彼はラストシーンで自らのアイデンティティを知ることになるが、自縛霊が救われたところを見せるために、メイクを落として素顔を見せるシーンがあってもよかった。

福島県立相馬農業高等学校飯舘校『－サテライト仮想劇－いつか、その日に、』

福島県に残った最後のサテライト高校をめぐるドキュメンタリータッチの作品。教室がイメージされた舞台。その角にライト（サテライト＝衛星のイメージ）が設置されている。その微かな明かりはサテライト校の存在感を示すが、それはどこか住民たちの生命にも見える。切り捨てられ、忘れ去られていく場所とそこで生活する人々は、そのまま現在の福島を彷彿とさせる。真っすぐな台詞に、割り切れなさ

が残って切なかった。

兵庫県立東播磨高等学校『アルプススタンドのはしの方』

甲子園球場一塁側アルプススタンドの端の方が舞台。そこは、どこかにやり切れなさを背負った、登場人物たちの定位置なのかもしれない。そんな４人が徐々に試合に引き込まれ、シンクロしていく。彼らがスタンドから眺める試合や応援などの風景から、高校生の抱える様々な問題が垣間見える。このあたりの設定が面白い。ただ、９回表の攻撃はスタンドも息が詰まるのではないか。試合経過、つまり、球場内の呼吸や溜息をシーンに反映させていく工夫があれば、"端"が一転して"全体"に転化する幕切れは、球場が劇場とも重なり、より劇的になったと思う。

岐阜県立加納高等学校『彼の子、朝を知る。』

私たちと８月をテーマに創作された作品で、舞台中央には盆踊りの櫓を模したセットが組まれ、ラジオ体操の「新しい朝」から、「在ったらしい朝」をモチーフにシーンが展開する。さらに、夏のイメージである、盆踊り→先祖と私、花火→銃声（戦争）などが、万華鏡のように交錯しながら、「今、ここにいる私」の生を意識させていく。出演者のキレのある身体からくりだされる動きと台詞が記憶に残った。

北海道北見緑陵高等学校『学校でなにやってんの』

たった１人の放送局員の山田が、ドキュメンタリー番組を制作するための取材をとおして、自らを含め、クラブ活動を見つめていく。舞台は放送室で、装置の移動を黒衣たちが、明かりの中で堂々と行う。この動きのリズムと表現が作品全体の喜劇性を作っている。黒衣が演劇部員たちにも見えて頼もしい。ラストは部長たちがエールを送り合うが、もう少し個々の、特に山田の陰影が見たかった。

埼玉県立新座柳瀬高等学校『Love ＆ Chance！』

18世紀のフランスで活動した作家マリヴォーの『愛と偶然の戯れ』を翻案した作品。秀逸なのは上演台本である。どの訳を底本にしているかは不明だが、現代の日本語への変更と、入れ子細工のように仕組まれたシーンの再構成は巧みだ。特に、今の私たちにはわかりにくい、身分の上下に関係する言い回しにも上手く対応している。中央の扉を活かした空間構成も見事だ。ただ、演技（特に台詞）がこれらの企みをいかせなかった。

（日本大学芸術学部教授・東京演劇大学連盟理事）

第63回全国高校演劇大会（宮城）を見て

来栖　敏行

退職後、高校演劇から少し離れてしまった感があったので、今回審査員として大会に参加することがとても楽しみでした。12校の出演校の作品を拝見するのはもちろん、他の審査員の方々との演劇談義も楽しいものとなりました。感謝です。

千葉県立八千代高等学校『煙が目にしみる』

まず、この脚本を選んだことに拍手。年齢層の違う人物を演じることが難しい。「死」によって浮かび上がってくる「生」、「家族のあり方」を描くことが難しい。この難題に立ち向かいながら、よく健闘している。今まさに焼かれているはずの死人が生前のような姿で現れるという設定が面白いのだが、面白さのさきにペーソスがにじんでくる。そこまで観客を引き込んでゆくためには、浩介と栄治の人物像を明確にする工夫が必要かと思う。

埼玉県立秩父農工科学高等学校『流星ピリオド』

脚本を読んだときより、実際に舞台を見た方が心を動かされた。（脚本が悪いという意味ではない）幕開きで照明がうっすらと明るくなって行くところが効果的だった。セットもパイプをうまく使って奥行きや高さを出している。非日常感も出ている。冒頭のミイコの台詞もよく伝わったし、ハルキヨの台詞が一部変更になったのもわかりやすくなったと思う。テンポがよく最後まで飽きずに見られた。

徳島市立高等学校『どうしても縦の蝶々結び』

脚本は面白かった。実際に舞台の幕が上がった時には、まずセットが丁寧に作られていることに惹かれた。物語前半の事務室の様子は、人物のかき分けがしっかりできていて安心して見られる。「蝶々結びができない」というエピソードには高橋の欠落感が感じられてよかった。ただ、後半高橋の葛藤をイメージに頼りすぎて物語に弛みが出てしまったのが残念だった。

宮城県名取北高等学校『ストレンジ　スノウ』

地域の問題を取り上げて顧問と生徒で作り上げていったことに、拍手。さて、幕が上がってそのセットに驚いた。厚い壁で閉ざされた空間、それだけで

緊迫感が伝わる。ラストシーンの有美とリカも迫力があった。気になるのは、序盤から登場人物全員の表情や台詞に緊迫感が感じられる点。前半は高校生の何気ない日常を描いて、それが壊れて心の奥が現れて行くという過程を見せた方がラストシーンが生きるのではないか。

茨城県立日立第一高等学校『白紙提出』

関東大会で見た時よりも整理されて見やすくなったと思う。例えば、父・母・弟はそのハチャメチャぶりが面白いのだが一定の抑えがきいていて、大事な台詞が耳に届いた。かえでまでもが果敢に笑いを提供するなど飽きさせない舞台運びを、端正なセットやさりげない効果が支えていた。前原の悩みは解決したのかという疑問も残るが、それも含めて「白紙提出」ということなのかな。

沖縄県立向陽高等学校『ＨＡＮＡＢＩ』

脚本を読んだ段階では、「おじさんには疲れそうな芝居だな」という感想。実際に幕が開いてみると、ジェネレーションギャップも何のその、キャスト全員全開で最後まで走り抜ける爽快さについつい引きずり込まれた。男子の肉体も魅力的だ。アクションギャグが楽しいし、歩き方も意図的にリズム感を出していたりして、疾走する舞台展開にアクセントを加えていた。演劇部全員が楽しんで作り上げているのが伝わってきた。

明誠学院高等学校『警備員林安男の夏』

脚本は面白く読めた。キャストの二人もなかなか達者で魅力的。ほぼ二人だけで60分を飽きさせなかった。違和感を感じたのは、まずセット。幕が上がった時の印象は教室というよりは廃墟だった。それから音響が多用され大きい。セットが割れるのも１回でいいんじゃないか。芝居の核の部分は魅力的なのだが、演出が過剰に感じた。役者があれだけうまいのだから、役者に任せて効果を控えめにすると、また違った魅力の芝居ができあがったのではないか。

福島県立相馬農業高等学校飯舘校『－サテライト仮想劇－いつか、その日に、』

福島県の高校生の現実を描こうという姿勢に拍手。セットもシンプルで好感が持てた。ただ、仮想劇の部分に大きなドラマがなく台詞だけで展開していくので単調になってしまった。訴えたいことをどう表現するかという視点がほしい。また、台詞がメッセージ調になりすぎて逆に伝わりにくい。もう少し等身大の高校生を描きながらメッセージにつなげていくといい。

兵庫県立東播磨高等学校『アルプススタンドのはしの方』

安田と田宮の何気ない会話から始まるが、その軽妙さについ引き込まれる。劇的な展開はないのだが、会話の積み重ねで４人の状況とか内面が描かれている。舞台に登場しない状況とか人物が自然と伝わってくる所も感心した。最後はそれぞれのカタルシスもある。安田と田宮の「予防注射」をめぐる会話にはつい笑ってしまった。この納め方も気持ちがいいと思う。

岐阜県立加納高等学校『彼の子、朝を知る。』

17名のキャストが整然と舞台上で動き、淀みがないのに目を奪われてしまった。ただ、部分部分はついて行けるのだが、その結びつきを追うのが大変だった。脚本には関係図が出ていたが、あれが理解できないとだめだろうか。もちろん、キーワードがちりばめられていて、それはよく聞き取れたのだが、何かを感じたり考えたりする余裕が私にはなかった。もう少し落ち着いて考えてみたいテーマだった気がする。

北海道北見緑陵高等学校『学校でなにやってんの』

確かに、文化部って何やってんだろうと思われているかもしれないな。そんな素朴な感情をもとに演劇の手練手管を楽しみながら舞台を作り上げているところが楽しい芝居だった。山田という人物像が魅力的だったので、最後は山田の寂しさとかで芝居を終わった方が印象的な最後になったかもしれない。

埼玉県立新座柳瀬高等学校『Love ＆ Chance！』

古典中の古典をよくやったと思う。セットもシンプルかつ十分だ。衣装も華やかだった。内容は複雑ではないが、それだけに舞台上のリアリティーが必要になる。舞台上の人物はすれ違いに気がつかないことが重要。恋愛劇だから、ドラントとシルビアの心理の変化も楽しみの一つだ。そのあたりの計画あるいは演出が不十分だった。まだまだ楽しくできる余地のある芝居だと思う。

（関東高等学校演劇協議会顧問）

熱　い　夏

近藤三知子

気候は時には肌寒い？こともあった仙台でしたが、高校生の熱気に包まれた熱い夏でした。全国大会の運営を2012年に経験した身としては、まず開催県の皆様の頑張りに胸が熱くなりました。さらに空席を丹念に数えて観客を誘導していた場内整備をはじめとする生徒実行委員のみなさん　あなたたちの頑張りがあって成立した大会です。

千葉県立八千代高等学校『煙が目にしみる』

家族の死を受けとめるという、高校生にとっては難しい芝居を素直に演じていて好感が持てました。おばあさんやお父さんを妙に年寄り臭く演じようとしていないのも良かったです。高齢の親族でも洋装の喪服も多い現在、思い切って洋装にしても良かったかと思うのですが、和服を着る場合はやはりもう少し努力と訓練も必要だったと思います。観客がそこに違和感を持ってしまうと折角のお芝居に水を差すことになるのではと思います。

埼玉県立秩父農工科学高等学校『流星ピリオド』

最初台本を読んだとき、チャットをどのようにステージ上で表現するのだろうかと勝手にイメージを膨らませていました。ところが普通の会話体で劇が進行し、今の高校生にはSNSはこれほど日常的なモノなのだと改めて感心しました。しかし同じ空間に集って相手の顔を見て話し合う会話と、SNS上のバーチャルな会話は似て非なるものであるはずで、劇の進行に従ってそれが観客にも提示されいく、その現実とは違う空気感が、見事な舞台空間と相まって展開し、現代に生きる高校生の悩み・葛藤が納得のいく生きた言葉として、衝撃的なラストまで、心を打ち続けました。

徳島市立高等学校『どうしても縦の蝶々結び』

まず、セットがリアルで見事でした。高校生が演じるのに、事務室の４人は社会人になりきれたとは言えない主人公を含めて高校生ではありませんが描かれるのは高校生も含めた若者の生き方。それが縦の蝶々結びという女子高校生のありふれた体験を切り口として、見事な脚本と自然な演技で丁寧に表現されていました。

ただリアルすぎる空間が回想などの時間を飛び越えるときの妨げになったのだけは残念でした。

宮城県名取北高等学校『ストレンジ　スノウ』

東日本大震災から６年、癒えることのない心の傷跡に真摯に向かい合った作品でした。直視できない事実を体験し、それと対峙して生きていかなければならない残された者の苦しみが作品全体から伝わってきました。ただ、セリフの言い方が同じようなせいでしょうか、台本では描かれていたキャストの個性が、舞台上では感じられなかったのは残念でした。

茨城県立日立第一高等学校『白紙提出』

オープニングのダンスで観客を掴み、最後まで笑わせ楽しませるお芝居でした。滑舌に少し難のあるキャストも見受けられましたが、主人公の女装とかけたのか一人で父・母・弟を演じるキャスティング加速装置　エロ本などなど、自分探しの末の自己肯定という定番のテーマを、高校生の視点から楽しんで演じることの素晴らしさを見せてくれました。舞台美術もカーテンの風や照明の変化など見事でした。

沖縄県立向陽高等学校『ＨＡＮＡＢＩ』

雑なのに、その雑さが妙にバランスがとれていて、なおかつそれが魅力になっている不思議な舞台でした。

前半からキャストの個性が光っていましたがパーツのままでいくのかと思わせながら、後半ではそれぞれが溶け合って舞台上で化学反応が起きたようで楽しかったです。ただ、シェークスピアは偉大です。そのセリフを使ってしまうとそれに飲み込まれてしまいます。ですからロミオとジュリエットの青春と今の高校生の青春とをもう少しリンクさるともっと良かったのではないかと思います。

明誠学院高等学校『警備員林安男の夏』

幕開きのおどろおどろしいセットで観客を誘う怪談仕立ての作品でした。そしてそのセットが高校演劇でよくある教室というのですから驚きです。しかも途中で壁が半分に割れて、グランドのライトまで見えることになります。あの教室は自縛霊からみた（みえた？）教室風景だそうです。自縛霊とだめな中年オヤジが出会い、交流することで変わっていくという一種の青春物の形をとった作品でした。地縛霊でなく自縛霊であること　随所に散りばめられた言葉「チャレンジする魂」そして桜、怖くてきれいな作品でした。

福島県立相馬農業高等学校飯舘校『－サテライト仮想劇－いつか、その日に、』

この芝居に出会うまで、サテライト校いう存在をまったく知りませんでした。決して巧みな芝居とはいえないかもしれませんが、現実の問題に真摯に向き合って作られたその朴訥さが見る者の心を打つの

だと思います。高校生が3年間何事もなく青春を過ごせるはずの場を失う、それも中学時代に抱えていた問題を克服して得た場であったのに。東日本大震災によって引き起こされたこの現実の重みが、忘れてならないメッセージとしてステージから伝わってきました。

兵庫県立東播磨高等学校『アルプススタンドのはしの方』

舞台は甲子園のアルプススタンドの端の方で、登場人物は演劇部2名と元野球部と帰宅部の、つまりいわゆるスクールカーストでは下位の高校生が4人だけ。

しかし登場しない野球部員の名前が脚本に書いてあるように、この4人が見せてくれるのは　自分たちも含めた現代の高校生の実態。それが自然で生き生きしたそして楽しい関西弁で見事に表現されていました。

しかもこの4人を含めた現代の高校生達の未来にも期待が持てるような楽しい舞台でした。

岐阜県立加納高等学校『彼の子、朝を知る。』

黒く組まれたやぐらともみえるセットが祭りを連想させ、その周りで次々と紡ぎだされる言葉の持つイメージが次の言葉と絡んで、全く違うイメージを作り出す実験的な構成芝居だったと思います。盆踊り、ラジオ体操、そして花火、役者の見事な動きもそのイメージを次へと紡いでいきます。新しい朝があったらしい朝へ、そしていつしか、未来からみるあったらしい朝、つまり現在にあったかもしれない戦争までイメージさせる力強い作品でした。

北海道北見緑陵高等学校『学校でなにやってんの』

演技は自然でテンポもよく、何よりもキャストが全員個性的です。放送室に集まった各文化部長たちも熱心なのかいい加減なのかよくわからない放送部顧問（実は筆者も放送部顧問です）もそして場面転換を担う黒衣たちまでです。今回は高校生がやりたいことを楽しんでやる、そんな芝居が目立った大会だったと思いますが、この作品がまさにそれで、本当に楽しませてもらいました。

埼玉県立新座柳瀬高等学校『Love ＆ Chance！』

「愛と偶然の戯れ」として知っている名作を、高校演劇でしかも女子のアルルカンで見ることができるとは、驚きでした。こだわりぬいた見事なセットと華麗な衣装がこの古典劇を成立させていました。恋人4人をすべて女子が演じていたこともバランス的には良かったのかもしれません。

（富山第一高等学校　放送演劇部顧問）

死と生の自己愛

大窪　俊之

死ということは、現代日本においても最大の関心事のひとつで、意図の如何にかかわらず生の写し絵のような死の光景が今年の大会には多く描かれていた。生への過剰な礼賛やこだわりは、かえって死への畏怖や嫌悪を表明しているようであり、生に対する何となく力の抜けたような達観は、現在とその先にくる死の瞬間への諦観を想起させる。演劇創造の視点からは、この半ば日常化した死生観に対して自覚的に企むということが作品の生命であるように思う。

①八千代高『煙が目にしみる』は少々大人の視点での、しかし死への掘り下げとしては卑近な大衆性に甘んじた脚本の選択であろう。高校生が異なる世代の役を行うときの、その過剰な生命感が何らかの異化を伴った演出上の工夫を見たかった。平面で空間を捉える舞台美術はテーマが捉えるべき世界の奥行きや重層性を殺してしまう。演技は素朴に理想化されたかたちを信じて疑われていない。原作から捨象した部分の大きさもあるが、高校生が既成脚本をやることの難しさがある。　**②秩父農工科学校『流星ピリオド』**はネット空間が現実に影響を与えてゆく境界例の作。現実を現実の行為によって変革し得ないという畏れのような通念が支配し、そして現実の人間の行いの意味は縮小してゆくというおきまりの構図。リオタールの「大きな物語の終焉」を象徴するような仮想空間にまつわる不可能性の問題。人間にできることはほとんど何もなくて、無抵抗にネット浸食を受け入れてゆくか、そっぽを向いて気にもとめないふりをするだけである。わたしは今でもネット空間とは嘘なのではないかと思う。現実世界に生きられなくなった私たちが落ち着く先はただ一つ、死だけである。したがって自殺はありふれた帰結であるという点で創造性に乏しいこの作品の意匠を恨んでしまう。　**③徳島市立高『どうしても縦の蝶々結び』**は何度となく観た。この作品の細かな整合性の悪さや矛盾が気になっていたが、地道な努力によって多くは抑制できた。ひとつが崩れると全体に影響してしまう引き算の演劇は、一方で不動の自己への執着に依存した演劇でもある。「頑張らないなんて怖くていえない」という先輩事務員に対して、高橋はどんな返答ができたのだろう。自己肯定に硬化した若者の心が動き出すさまはついに表現されなかったと思う。貧困や原発という一般化した問題が描か

れるとき、観客は世間的な自明性で受け取ることを避けられず、そうなることも折り込み済みで演劇がつくられる。ヘゲモニーに疑問を呈することは不道徳であり、ましてや当事者性が加われば口を挟むことすらためらわれてしまう。観る者が何を知っていて、どんな立場であるかということがもっと疑われていいと思う。空間の立体性はすこし斜めに切った程度で補われるものではない。　**④名取北高『ストレンジ　スノウ』。**角の見える舞台空間がかえって語りの場としての現実性を壊す。真面目に演じてしまうには役者たちが向き合う先に葛藤が弱い。冗長な言い回しで虚妄の語りがスムーズに受け取られ、深刻で余裕のない表現に観客の解釈が入り込む余地は生まれない。「ショアー」という映画の語れなさを思い出す。語れないものを繰り返し語ってしまうところにこの作品の難しさがある。　**⑤日立第一高『白紙提出』**は軽快なテーマ性で気が晴れた。映像的な効果や照明の演出をねらったが部分的で、全体の表現と合っていない。エロ本に固執してゆく表現を女子高校生が書いたところが面白いが、どうしても都合が見えてしまう。後半時折みせる潮が引いたような静止が妙な不安感を強調する。若者の不安定さというよりも、自己愛へ向かってゆく自身が身体に裏切られてゆくとき、それでも安定の中に居続けたいという確信犯的な停滞が不気味である。　**⑥向陽高『ＨＡＮＡＢＩ』。**照明が外れていても台詞が時々聞こえなくても関係ないやといいたげな自覚的なできてなさに、程良くブレンドされた大人の演出。これが既成台本であることを忘れそうである。原色のような個の魅力、まるで女の子が自分の魅力を知っていてそうする行為、企んでいるのかいないのかどちらともつかない表現である。大会を通じて唯一彼らだけが縦ノリの身体、二拍子の身体を持っていた。リズム感があるわけではない。しかし抑制された身体にはできない、またことさらに自らの身体性を誇るわけではない素朴な二拍子が賞味期限付きでここに残っていることを感じた。　**⑦明誠学院高『警備員林安男の夏』**は仕掛けがわかってしまう芝居。二人芝居の構図が展開を難しくする。別の要素が加わらないと結局言葉で展開するしかなくなって演技は重くなる。登場する小道具がそれなりに新しいのに意匠や演出は時代がかっている時間性の不明瞭さは居心地が悪い。映画的な映像から起こしてゆく演出の印象。ストレートプレイにストレートな生の肯定感。せっかくの異質な設定をもっと生かすべきだろう。　**⑧相馬農業高飯舘校『－サテライト仮想劇－いつか、その日に、』。**学校ヒエラルキーによって飯舘に関係のない生徒がサテライト校に集められ、校舎が飯舘に移設されるときに帰らず残留するという立場からの演劇は独特。誰にも何らかの当事者性はあり、その視点は尊重されていい。しかしつたなさや素朴さも回数を行えば疑いや葛藤を経て意味づけが変わり、本来一回性のものとしての告白が繰り返しによって観念の反復という説明大会に移行する。仮想というメタ的な演出がそれと意識されないさりげなさでなされるべきだった。　**⑨東播磨高『アルプススタンドのはしの方』。**気弱な「はしの方」であるはずの登場人物はそれほど控えめではない。時代的な強い自意識がそうさせるのであって、観ている側も多かれ少なかれそうだから妙に納得してしまう。５回裏から初めて試合終了までちょうど一時間、演劇の制限時間となっている。潮の満ち引きのような攻守の切り替えの空気感を基調に淡々とした会話劇にリズムを作る。平易な言葉しか使わない。試合に集中するたんびの類型的な動きは鼻につくが、とりあえずは着想と設定の勝利。　**⑩加納高『彼の子、朝を知る。』。**櫓－祭－花火－銃声－戦争－お盆という連想で成り立っているが背景になる歴史性や文化性が欠如していて説得力に乏しい。コンセプチュアルに作ろうとしてコンテクストレスが仇になってしまった。餓鬼を慰めるという盂蘭盆の発想に、去りゆくものを現在にとどめたいという潜在意識が重なるが、ユークリッド的で消費主義的な現在にあっては四世代が18歳で一列並ぶ光景がかえって生への執着を思わせる。戦争は薄いコードになってしまって不服。「在ったらしい／新しい」の掛詞は不発。タイトルならこちらの方が「花火」。　**⑪北見緑陵高『学校でなにやってんの』**は山田の存在感に拍手。うまく見えないところがうまくて器用。雑な感じ、チープ感が心地よくて、それなのにセットを真ん中割りしたり、大層なことをするので裏方に照明が意図せぬ当たり方をしたりして焦るところがなお面白い。半ば自覚的なんだろうと思わせるし、キャストに舞台装置の事情を意識させるメタ的な構図が演出とよく見合っている。何か考えているようにみえてもホントはそれほど考えていないという高校生が今っぽい。　**⑫新座柳瀬高『Love ＆ Chance！』。**300年前の演劇をいまここでやる理由はよくわからないのだが、精一杯の努力はしていたと思う。笑えるところも感嘆するところもおそらく原作のママ。恋のベクトルが身分や制度を超えてゆく前夜のような原作当時の時代性が、また逆転してゆくかにみえる今日の世相の中で何か新たな意味を持てばいいと期待していたがそんなものは見受けられなかった。キャストはタカラヅカ的。音響照明など手一杯感が見えて苦しい。

（徳島県立阿波高等学校演劇部顧問）

第１分科会 演技・演出 「もっと自分自身へ語りかけよう」

講師　高泉　淳子

講師の希望により、講習の時間は２時間。出場校の顧問の先生１名と代表生徒１名に参加してもらうことになった。舞台上に椅子が24個置かれ、下手側に顧問、上手側に生徒が座る形で講習がスタートした。大ホールでの実施だったが、他の参加者もできるだけ近くで見てほしい、可能であれば実際に講習に参加してほしいということから、客席での見学ではなく全員が舞台に上っての講習となった。

実技に入る前に、まず高泉さんの演劇や演技に対する考えが述べられた。高校生が強く意識していると高泉さんが感じられた「台詞を大きく明瞭な声で言う」「台詞をよどみなく上手に言う」ことはあまり大切ではなく、見ている人に何を伝えたいのか、それをどう伝えたいのかをよく考えることが大切であること。そして自分自身がそれを強く意識して心で感じれば、小さな声でもそれは伝わるということ。自分の心と身体に言い聞かせ、話しかけたことが跳ね返って観客に伝わるのだということなどを教えていただいた。

次に上演校の実際の台詞を用いて、さきほどの演技に対する考えを実践してみせていただいた。正面を切って大きな声で言わなくても（言わないほうが）伝わるということもあるのだということが良く理解できた。

後半は講師が準備してきた音楽に合わせて上演校の生徒たちを繰り返し歩かせることから始まった。普通に歩くということがまず難しいと感じた。次に上半身の動きを伴った様々なバリエーションを見せていただいた。これらの基本的な身体訓練は実際に高泉さんたちプロが実践しているものでありながら、部活動の中でも簡単に実践できて効果のあるものであった。台詞を言うことだけに一生懸命になるのではなく、感じられる心と身体をつくることが大切だということを教えていただいた。

最後はハムレットのオフィーリアの台詞を用いて、上手に台詞を言うのではなく、この台詞は何を伝えたいのかということを考えることが大切だということを改めて確認し、ラストは短い一言の台詞を使い、台詞と肉体のシンクロという体験を上演校の生徒の皆さんにしていただいた。

もっと時間があればもっとたくさんのことを教えてあげたい。チャンスがあったらまたこのような機会を作りたいという言葉に、高泉さんの演劇に対する熱い思いが伝わる講習となった。

（文責　宮城県石巻北高等学校　笠原　　彰）

第２分科会 演　出 演出家の役割と演出の可能性

講師　佐川　大輔　　アシスタント　中原くれあ

第２分科会は、参加者がゲームや（先生が用意された）本読みに取り組みながら進められた。

【リラックスすること、失敗すること】

緊張していると人間の心はどんどん萎縮して、動かなくなってしまう。結果、「こうした方が良いのでは」といったよくわからない論理的なものに縛られていってしまう。演技をやる時にはできるだけ自由でありたい。結果的に面白ければ正解である。魅力的な劇をする、それが一番だ。稽古やワークショップは，失敗して良い場である。失敗というのは成功するための色々な挑戦だ。

【演出の仕事】

役者が自然に動きたくなる＝心が動く、観客も自然に心が動いてしまう、そうなるように様々な「もの」をつくっていくことが演出の大事な仕事である。演技とは「説明」ではない。人の心、役者の心、観客の心を動かす、これが演劇の一番の魅力だ。想像を羽ばたかせていくと同じ台詞で違うことができる。台本をもらったとき、その台詞の「正解」を探そうとすると演劇的には面白くなくなってしまう。面白いものはそれをちょっとはみ出していた

り、こんなことあり得るのかということを成立させたところにある。与えられた台本からできるだけそういったものを広げ、膨らませ、なおかつ本題は守る、成立させると良い演出ができると思う。

【演出の可能性】

台本には様々な可能性がある。演出するときにはどんな台詞も１つ１つなるべく粒立たせたい。演出家は状況設定を強化、具体的にして、演技がよりドラマチックになるように、心が動くようにする。台本に書いてある状況をより役者が演じやすくすること、さらに書いていないことを膨らませて、より劇としてドラマチックに見せ、その方向に役者の心が動く、結果観客の心が動くようにする、これが演出の仕事の一つだ。役者が状況設定を理解して演じられるようにすれば、見てる人にもある程度伝わる。ここが大事だ。

【まとめ】

パンフレットに演出をする人の名前を書いていない学校が見受けられるが、演出は芝居の根本となる大切なものである。特に演出が決まっていないならば全員の名前を書いても良いくらい、演出は大事なものだと考えてほしい。

（記録者：宮城県利府高等学校　渡邉　恒明）

第３分科会　劇の場　コミュニケーションを考える

講師　藤崎　周平

演劇に限らず、コミュニケーションの大切さは多くの人が実感している部分ではないだろうか。しかし、演劇にかかわる者としては、やはりコミュニケーションというものを演劇の場面で考えてしまいたくなる。そんな思いをもつ人にいくつかのヒントを教えてくれた、そんな講習会でした。講習の後半はワークショップで参加者を楽しませながら進めていましたが、ここでは普段教鞭をとる人ならではの、空間および時間の効果的な使い方をも示してくれました。

以下に今回の講習のポイントとなるものを、数多くあったものの中からいくつか取り上げます。それぞれに自分のことや所属する部活動、あるいはそれ以外のコミュニケーションの場などにあてはめ、今後の活動などにせひ参考にしてほしいと思います。

１．観客に息をはかせる

観客は舞台に対する期待感から力が入り、息をはきずらくなっています。しかし、劇は観客とのコミュニケーションが大事なので、こうした息を殺した観客は必ずしも劇にとって良いものではありません。観客とのコミュニケーションをとるには、演じる方が観客に息をはかせると良いです。人は理解した時に息をはき、考えている時は止めています。このことをふまえ、観客が息をはけるような良い環境をつくることを心がけてみよう。例えば面接試験のような場面でも、面接官をしゃべらせることができると良いです。

２．良い役者は受信ができる

前述の１．に繋がるものです。良い演技とは相手の話を受信し（相手を受け入れ）、その上で台詞を送ることです。これに対し、頭で考えて自分の番が来たから台詞を言うのは、内容がわかっても相手や観客をリラックスさせることはできず、コミュニケーションがとれているとは言えません。相手に対しシャッターを下ろさず、やりやすかったと言われる役者が良いです。

３．演技は常に同じではない

初日にうまくいったネタ（演技）も、次の日には同じようにやってもうまくいかないことがあります。これは、観客の反応に対し初日は知らなかったがゆえにうまくいき、次の日は知ってしまっていることでネラってしまうことで起きることです。演技は常に同じではなく、観客もまた同じではありません。演技が上手な人は、演じるその場で初めてやったかのように演じることができる人で、内容への興味とも深くかかわるものです。

さて、上記のポイントから、良い役者になるために何が必要か、それぞれ考えてみてください。

（文責　宮城県仙台第三高等学校　林　剛史）

第４分科会　舞台技術創造講習
高校演劇をプロの視点から

講師　土屋茂昭/伊藤雅子/長田佳代子/乳原一美/藤田赤目/吉木　均

第４分科会は、舞台の技術的なことを学ぶ講習だったが、その素材としてオリジナルの脚本「しあはせのことのは」が使われた。この脚本は昨年、石巻北高等学校が上演したものを、作者である菅野準先生が10分程度に内容を凝縮したもので、親子の愛について深く考えさせられるものに仕上げた。これを宮城県白石高等学校演劇部の生徒を中心に、同校顧問の佐藤文隆先生が演出をして講習会に臨んだのである。講習会で使った装置については、土屋氏の指導の下、３日程度をかけて宮城県内の生徒十数名によって作成された。素材は、片ダンボールが主で、ラテックスを接着剤として使って作ったものである。また、装置製作中に、金井大道具から２名の講師が派遣され、装置の着色指導や、図面に書かれた装置図からどう実際にその形を切り出すかの実演や、具体的な背景の書き方の講習会が行われた。

講習会そのものは２時間の講習で、まず土屋氏から講習会の趣旨や関係したスタッフが紹介された。その後、ボーダーライトだけの明かりと、音については佐藤先生の口立てによる、素の通しが披露され、関係生徒が紹介された。その後、乳原氏による照明の説明がなされた。ここから先は、普段は聞こえないようにしているインカムの通信をあえて会場に流すことで、どんなやり取りがなされているのかという事が講習会参加者に分かるようになっていた。あかりについては、どのような効果を狙って、そのあかりが仕込まれているのか説明され、プランについては１場面ずつ図にかいていき、それを最終的に１枚の紙にまとめる方法が紹介された。そして、ワンシーンを実際にインカムで調光室とやり取りしながら作成した。

次に、藤田氏による音響についての説明がなされた。会館に常設されているスピーカーの他に、どこから音を出したら効果的か、またその際スピーカーをどういう向きで配置するのがいいのかという事が、実際に音を出しながら聞くことが出来た。例えば脚本にあるロボットの起動音については、そのロボットの立ち位置の真上にスピーカーを、真下に向けて吊る事で、お客さんにはロボットから音が出ているように感じるであるとか、台詞に重ねるBGMについては、メインスピーカーではなく、ステージ内に仕込んだスピーカーで流すことで役者の台詞も聞きやすくなることや、虫の音については、音響の他に、虫笛を用いて舞台袖から生の音を出すという実験も行われた。

その後、音響と照明を入れて、同じ作品を再度上演した。舞台は、暗転幕で幕を下ろし、素の通しからどのように変化したかを確認した。インカムが会場に流れていることで、一つの舞台の開演から終演まで、裏でスタッフがどのようなやり取りをしているのかも聞くことが出来た。

最後に、講師６名に、作者、演出家、照明補助の３名が加わった座談会が開催された。座談会では、各自がこの講習会で何をしたかったのか、何を伝えたかったのかが語られた。座談会後は、バックステージツアーが行われ、参加者が舞台上の装置を間近に見ることが出来た。

（文責　仙台市立仙台商業高等学校　笠原　好佐）

第５分科会　部　活　動
これからの諸君の演劇活動のために

講師　来栖敏行/近藤三知子/大窪俊之

講師の先生方から自己紹介をして頂いた後で、生徒からの質問に講師の先生方から、ご助言をいただきました。

Q：客を呼ぶ工夫には、どのようにしたらいいですか？

A：①顧問メール、生徒どうしの連絡網を利用するのも有効な方法だと思う。

②口コミで増やす。ビラを撒くのも一つの手だと思う。ピンポイントが大切で、できるだけ上演回数を増やし習慣化させる。

③できるだけ担任や教科の先生方に声をかけ来てもらい宣伝の協力をしてもらう。

Q：芝居にタブーはありますか？恋愛はタブーですか？

A：①恋愛は失敗しやすいと思う。恋愛による二人だけの世界ではなく、二人以外に様々な人物を登場させ考えさせていくと良いと思う。

②タブーの問題ですが、アメリカの高校生の演劇ではベッドシーンもありますが、日本ではどうかと思います。

③教育上の配慮と言うことを考えるとタブーは存在すると思うが、学校を離れて芝居にはタブーはないと、基本的には思う。私としてはストレートな恋愛を作ってみたい。

Q：全国大会までの期間に、何をしていましたか？大会までの期間が長すぎるように思われます。

A：①一回離れて、別なことをする。別な作品で外部公演を、その期間中にする。つまり期間をおいて新鮮な気持ちで行うことが大切。

②新しい目標を設定して、新しい気持ちで台本や大道具に触れ、マンネリ化しないようにする。

Q：モチベーションのあがらない部員はどうしますか？

A：①他の部員が行っている演技などの取り組みを観せて刺激を起こさせる。また、公演のために自腹をさかせるのもいいのでは。

②前もって公演のローテーションを決めておき自分の役目を自覚させる。

Q：台本を作る時にヒートアップし過ぎて、たくさんの意見が出すぎてまとまらないのでどうしたらよいか？

A：①活発な意見が出て、作っていけるのはとても良いことで羨ましい。

②二つの芝居を作って実際に演じてみて、どちらが良いか皆で話し合い決め手はどうでしょうか？

③それぞれ台本を書いてみて、それぞれが観て、合評しあってみてはどうでしょうか？

＊講師の先生方が、生徒の質問に熱心に答えて頂き、生徒はとても有意義な時間を過ごすことができたと思いました。紙面上、生徒の質問への助言のみを掲載しました。

（文責　宮城県名取北高等学校　安保　　健）

第６分科会　生徒講評委員会

生徒講評委員会合評会　講評委員の目で見た上演作品

合評会では、生徒講評委員による司会進行のもと、生徒講評委員会で出された上演作品に対する討議の内容、講評が紹介された。それをもとに作品や芝居作りについて、講演校や観客の演劇部員・顧問を交えて活発な質疑応答がなされた。

①「煙が目にしみる」（千葉県立八千代高等学校）

死んでしまったあとには何も伝えられないことから、日頃から感謝や本音を伝えることが重要だと感じさせられる劇であった。人の死をポジティブにとらえる劇の中で、死者を演じるためにどのようなことを意識したか、脚本選びはどのような観点で行ったのかなどについての質疑応答があった。

②「流星ピリオド」（埼玉県立秩父農工科学高等学校）

ＳＮＳ等のネット社会において、相手の顔を直接見ることができないつながりの中で生じる恐怖と、直接会って言葉を交わすことの大切さを考えさせられる劇であった。流星が一瞬で燃え尽きることと同じように人の後悔も一瞬のもので、同じことを繰り返しているのではないかという質疑応答があった。

③「どうしても縦の蝶々結び」（徳島市立高等学校）

私たちを支えてくれている人とのつながりの有難さを感じさせ、目標に向かって努力したい、努力している人を応援したいと思わせる劇であった。また、精巧に作りこまれた事務室に驚かされた。努力が報われなくてもそれは無駄ではないと言えるかどうかという意見が出たことについての質疑応答があった。

④「ストレンジ　スノウ」（宮城県名取北高等学校）

東日本大震災によって深い心の傷を負った方々には、周りの人々とのつながりが必要であることを教えてくれた劇であった。質疑応答の中で、同じ震災を経験していても心の傷の深さは人によって違い、人によって乗り越え方も違うことが表現されているという意見があった。

⑤「白紙提出」（茨城県立日立第一高等学校）

自分の個性を周囲にさらけ出すことの不安と勇気が描かれ、お互いが理解し認め合うことのできるつながりによって、救われる人がいるということを感じさせられる劇であった。劇中でバレエを取り入れた理由は何であったか、最後のシーンで主人公はどこを見ていたのかなどについて質疑応答があった。

⑥「HANABI」（沖縄県立向陽高等学校）

物事に本気で挑戦することの素晴らしさ、やりたいことに自分から取り組んでいくことの大切さを感じさせられ、自分も登場人物のように本気で行動しようと勇気づけられる劇であった。キリンの登場の意図や、たばこのシーンの仕組み、脚本選定のきっかけなどについての質疑応答があった。

⑦「警備員林安男の夏」（明誠学院高等学校）

自分の力の限界を決めつけて、チャレンジすることを避けるのではなく、がむしゃらにやってみることが大切であることを感じさせられる劇であった。教室が左右に引き裂かれて光が照らされるシーンが印象的であった。最後の花吹雪の意味や、舞台装置のヒビの理由などについて質疑応答があった。

⑧「サテライト仮想劇―いつか、その日に、」（福島県立相馬農業高等学校飯舘校）

自分を変えてくれた大切な場所を去らねばならないという切なさと、今もなお震災に苦しむ高校生たちの姿がリアルに描かれている劇であった。机といすで校舎の形を作るところがふるさとに対する思い、切なさを表現していた。この劇を通して伝えたかった思いについての質疑応答があった。

⑨「アルプススタンドのはしの方」（兵庫県立東播磨高等学校）

頑張っても報われないことはあるけれど、それでも目をそらさずに頑張ることの大切さが伝わってくる劇であった。観客の歓声や演奏、細部まで作りこまれたアルプススタンドなど、実際に甲子園球場にいるかのような臨場感があった。しょうがないと言って目をそらしていた理由についての質疑応答があった。

⑩「彼の子、朝を知る。」（岐阜県立加納高等学校）

戦争の恐ろしさ、いつ戦争に巻き込まれるかわからないということ、今の日常が当たり前のものではないということを教えてくれた劇であった。黒服の花火の意味や脚本ができるまでの過程、ラストのシーンでの音の聞こえない花火の意味などについての質疑応答があった。

⑪「学校でなにやってんの」（北海道北見緑陵高等学校）

みんなで好きなことをすることの良さ、やっていることを周りが応援してくれることのありがたさをたくさんの笑いを交えながら教えてくれる劇であった。きもくなければ何もできないという言葉の意味や主人公の心情の変化、この作品ができるまでの過程などについて質疑応答があった。

⑫「Love ＆ Chance!」（埼玉県立新座柳瀬高等学校）

登場人物がなかなか結ばれない姿にじれったさとときめきを感じ、見終わった時には自然に笑顔にさせられるような劇であった。観ている側も、やっている側も楽しんでいたという意見が出た。この脚本を選んだ理由や女性が男役をやるうえで苦労した点などについての質疑応答があった。

（文責 宮城県石巻北高等学校 新井田将光）

事務局通信

第63回宮城大会を前に、今年度第１回常任理事会・理事会が行われました。

2016年度事業報告・決算報告及び会計監査報告が承認されました。事業報告の中では、昨年度岐阜県大垣市で、春季全国高等学校演劇研究大会にあわせて開催された第３回全国理事会の出席が、広島で行われた出場校打ち合わせ会にあわせて第１回の理事会よりも多くの出席者がおり、当初のねらいを達成することができたことが報告されました。2017年度第３回理事会についても、神奈川県横浜市で行われる春季全国大会にあわせて開催されることが承認されました。

宮城大会については、４月の打合せ会での停電事故の報告や照明で扱われるコモスデータの取り扱いについて、大会を前に報告がありました。

著作権ガイドラインの修正については、昨年度第３回に提示をした中国ブロック案（全国案）が承認されました。修正案の詳細については、全国高演協のホームページ（http://koenkyo.org/?page_id=52）に掲載されておりますので、確認をしてください。

昨年度第３回の理事会で提案をした春季全国大会の映像配信についてですが、まず、各都道府県からの意見の集約の結果が報告されました。その中で、著作権や生放送についての不安などの意見が出ておりました。事務局からは、録画したものを確認して配信することと配信を希望しない上演校に対しては配信をしない方向で、業者と話し合いを進めていくことになりました。

規約の一部改定について承認がされました。今まで理事については、各都道府県３名としていたのですが、３名のうち１名は原則として、都道府県事務局長（委員長）とすることと改定されました。

宮城大会で２回目となる舞台技術講習会は、日本照明家協会様をはじめ多くの舞台スタッフ関係の協会や、今年度より協賛団体となった金井大道具株式会社様の協力により、充実したものになりました。

第12回春季全国高等学校演劇研究大会は、2018年３月16日㈮～18日㈰神奈川県青少年センターで行われます。日程などの詳細については、全国高演協ホームページ(http://koenkyo.org/）に情報を掲載していく予定です。

最後になりますが、本協議会の活動が充実した活動は、特別協賛団体である東京工科大学 日本工学院専門学校様、協賛団体の桐朋学園芸術短期大学様、多摩美術大学様、四国学院大学様、東京フィルムセンター映画・俳優専門学校様などの各支援団体様の支援で成り立っております。日頃からのご支援に感謝申し上げます。

（事務局・加藤）

2016年度　全国高等学校演劇協議会決算報告

＜一般会計＞

収入の部

大項目	小項目	予算額	決算額	摘　　要
基本収入	会費	2,100,000	2,142,000	1,000円×2142校分
その他の収入	活動報告広告	500,000	780,000	「活動報告集」広告掲載料
	寄付金	100,000	110,000	「演劇創造」広告掲載料等
	高文連より	300,000	312,240	高文連より活動補助・旅費
	利息	500	32	三井住友銀行
繰越金	前年度より	2,944,637	2,944,637	繰越金
民間支援	特別協賛金	3,000,000	3,000,000	東京工科大学 日本工学院
	協賛金	1,424,000	1,824,000	NHK・四国学院・東京フィルム・桐朋芸術・金井大道具
合　　計		10,369,137	11,112,909	

支出の部

大項目	小項目	予算額	決算額	摘　　要
管理費	旅費・交通費	2,000,000	2,070,202	広島、岐阜、宮城、近距離旅費等
	役員派遣費	300,000	329,200	会長、事務局長旅費
	会議費	80,000	80,000	常任理事会費用
	通信費	150,000	170,098	切手・ファクス・送料・HP維持費等
	印刷費	150,000	95,040	名簿・賞状
	消耗品費	20,000	32,243	文具・タックシール・名刺等
	事務局維持費	70,000	70,000	行動費
	記録費	20,000	20,000	全国大会上演脚本
	雑費	30,000	25,698	謝礼・差入れ等
事業費	会誌発行	950,000	801,770	演劇創造134・135号
	ブロック連絡費	10,000	8,100	各ブロックへの振込費用
	活動報告集	900,000	896,400	活動報告
渉外費		100,000	47,900	審査員慰労費・弔慰金
大会運営費	ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院ブロック補助(25万×８)
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援(宮城県　チラシ5万含)
	春季研究大会	300,000	300,000	特別会計へ
予備費		2,787,707	278,703	舞台技術講習会補助
合　　計		10,367,707	7,725,354	

＜特別会計＞

収入の部

大項目	小項目	予算額	決算額	摘　　要
補助金	全国高文連	300,000	300,000	全国高文連活動補助費
	全国高演協	300,000	300,000	一般会計より
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
		400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		645,263	645,263	前年度繰越金
合　　計		1,945,263	1,945,263	

支出の部

大項目	小項目	予算額	決算額	摘　　要
大会運営費	出場校補助	300,000	300,000	出場校運搬費補助(30,000×10校)
	運営費	1,000,000	1,000,000	消耗品・委託費・印刷費・旅費等
	予備費	645,263	0	
合　　計		1,945,263	1,300,000	

2017年度　全国高等学校演劇協議会予算

＜一般会計＞

収入の部

大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘　　要
基本収入	会費	2,142,000	2,100,000	1000円×2100校
その他の収入	活動報告広告	780,000	500,000	「活動報告集」広告費
	寄付金	110,000	100,000	「演劇創造」広告費
	高文連より	312,240	300,000	役員旅費・運営費
	利息	32	30	三井住友銀行
繰越金	前年度より	2,944,637	3,387,555	前年度繰越金
民間支援	協賛金	3,000,000	3,000,000	日本工学院
		1,824,000	1,824,000	四国学院・東京フィルム・桐朋学園・NHK・金井大道具
合　　計		11,112,909	11,211,585	

支出の部

大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘　　要
管理費	旅費・交通費	2,070,202	2,100,000	仙台、横浜、長野　事務局会議旅費等
	役員派遣費	329,200	350,000	役員派遣
	会議費	80,000	80,000	臨時常任理事会開催費
	通信費	170,098	170,000	切手、送料、ファクス等
	印刷費	95,040	100,000	名簿、賞状、封筒等
	消耗品費	32,243	50,000	文具、コピー等
	事務局維持費	70,000	70,000	事務局長行動費、会議室代等
	記録費	20,000	20,000	脚本購入等
	雑費	25,698	30,000	謝礼等
事業費	会誌発行	801,770	950,000	演劇創造136、137号
	ブロック連絡費	8,100	10,000	各ブロックへの振込費用等
	活動報告発行	896,400	1,000,000	各都道府県活動報告集
渉外費	渉外費	47,900	50,000	全国大会関係
大会運営費	各ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院支援金(各ブロック25万円)
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援(長野県、チラシ５万円含)
	舞台技術講習会	278,703	400,000	舞台技術講習会補助
	春季全国大会	300,000	300,000	特別会計へ
予備費		3,387,555	3,031,585	
合　　計		11,112,909	11,211,585	

＜特別会計＞

収入の部

大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘　　要
補助金	全国高文連	300,000	300,000	春季全国大会運営補助費
	全国高演協	300,000	300,000	一般会計より
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
		400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		645,263	645,263	前年度繰越金
合　　計		1,945,263	1,945,263	

支出の部

大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘　　要
運営費	出場校補助	300,000	300,000	出場校運搬費補助
	運営費	1,000,000	1,000,000	消耗品・委託費・印刷費等
	予備費	645,263	645,263	
合　　計		1,945,263	1,945,263	

「お詫び」

今年2017年夏の宮城大会の折に発行しました『2016年度活動報告集』の「兵庫県」のページで「A県大会報告」の「５　大会結果」〔最優秀賞〕の３校目に下記の一文が欠落しておりました。訂正してお詫び申し上げます。

県立長田「Dear Future」結城真央と演劇部一同＋顧問／作（生徒顧問合作）